

麦野A遺跡9

— 麦野A遺跡第23次・24次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1323集



2017

福岡市教育委員会

麦野A遺跡9

—麦野A遺跡第23次・24次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1323集



遺跡略号 MGA-23

調査番号 1441

遺跡略号 MGA-24

調査番号 1446

2017

福岡市教育委員会

序

北部九州は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方から交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも福岡市には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は共同住宅建設、農業用倉庫建設に伴う麦野A遺跡第23次・24次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代～中世末の遺構を検出するとともに、当時の集落にともなう遺物が多数出土しました。

これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後本書が文化財保護についての理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、土地所有者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会
教育長 星子明夫

例　　言

- 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設・農業用倉庫建設に伴い、福岡市博多区麦野三丁目11番25、11番26、11番33、11番60、11番59において発掘調査を実施した麦野A遺跡第23次・24次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理・報告書作成は、麦野A遺跡第23次は受託事業および国庫補助事業、24次は国庫補助事業として実施した。
- 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
- 本書に掲載した遺構実測図の作成は清金良太（23次）、久住猛雄・清金（24次）が行った。
- 本書に掲載した遺物実測図の作成は、清金・松崎友里・井上加代子（23次）、上方高広・久住（24次）が行った。
- 本書に掲載した遺構および遺物写真的撮影は、久住・清金が行った。
- 本書に掲載した挿図の製図は、清金・松崎（23次）、谷直子・小畠貴子・久住（24次）が行った。
- 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系（第II座標系）によるものである。
- 本書で用いた方位は座標北で、真北より $0^{\circ} 18'$ 西偏する（23次）。ただし24次の各遺構図には磁北を用いた。真北より約 $6^{\circ} 40'$ 西偏する。
- 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、溝をSD、土坑をSK、井戸をSE、ピットをSP、包含層をSXと略号化した。
- 23次は遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。24次は挿図ごとの番号としている。
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆および編集は、23次を清金、24次と抄録を久住、全体を清金が行った。

遺跡名	麦野A遺跡	調査次数	第23次	遺跡略号	MGA-23
調査番号	1441	分布地図図幅名	麦野012	遺跡登録番号	020048
申請面積	1,065 m ²	調査対象面積	415 m ²	調査面積	347 m ²
調査地	福岡市博多区麦野三丁目11番25、26、33、60、59				
調査期間	平成27（2015）年1月5日～3月6日				

遺跡名	麦野A遺跡	調査次数	第24次	遺跡略号	MGA-24
調査番号	1446	分布地図図幅名	麦野012	遺跡登録番号	020048
申請面積	556.71 m ²	調査対象面積	150 m ²	調査面積	155.4 m ²
調査地	福岡市博多区麦野三丁目11番59				
調査期間	平成27（2015）年2月25日～3月27日				

本文目次（1）

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 23次調査の記録	7
1. 概要	7
2. 遺構と遺物	7
1) 掘立柱建物 (SB)	7
2) 溝 (SD)	9
3) 井戸 (SE)	12
4) 土坑 (SK)	14
5) その他の遺物	16
3. 結語	17

挿図目次（1）

第1図 麦野A遺跡位置図 (1/25,000)	3
第2図 調査区位置図 (1/1,000)	4
第3図 第23・24次調査区位置図 (1/2,000)	6
第4図 第23次調査区全体図 (1/150)	8
第5図 第23次調査土層図 (1/40)	9
第6図 SB044 実測図 (1/40)	9
第7図 SD001 実測図 (1/30) および出土遺物実測図1 (1/3)	10
第8図 SD001 出土遺物実測図2 (1/3)	11
第9図 SE090・SE133 実測図 (1/40) およびSE090 出土遺物実測図1 (1/3)	13
第10図 SE090 出土遺物実測図2 (1/3)	14
第11図 SE133 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	15
第12図 SK053・SK054 実測図 (1/60) およびSK054 出土遺物実測図 (1/3)	16
第13図 SK052・SK030・SK032・SK063 実測図 (1/40)	17
第14図 SP075・SP079・SP089・SP097・遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)	17

第23次調査 図版目次

PL. 1 全体写真
PL. 2 SD001
PL. 3 SE090・131
PL. 4 SE090・131 SK053・054
PL. 5 SK053・054・030・052・I 区壁面土層
PL. 6 遺物写真
表表紙写真 第23次調査 I 区全景

本文目次（2）

IV. 第24次調査の記録	25
1. 調査の概要	25
2. 遺構と遺物	25
1) 検出遺構	25
2) 出土遺物	37
3. 調査のまとめ	40

挿図目次（2）

第15図 麦野A 24次調査区全体図 (S = 1/100)	26
第16図 調査区北壁横断土層図 (S = 1/50)	27
第17図 SD001 土層図 (S = 1/40)	28
第18図 SX003 東西土層図 (S = 1/40)	28
第19図 SX002・003 平面図・断面図 (S = 1/60)	29
第20図 SX002 断面図 (S = 1/60)	30
第21図 SK004 平面図・断面図・土層図 (S = 1/40)	31
第22図 その他の土坑・溝状遺構実測図 (S = 1/40)	33
第23図 SB01 実測図・柱穴土層断面図 (S = 1/40)	34
第24図 SB02 実測図 (S = 1/40)	35
第25図 SD001・SX002・SX003 出土遺物実測図 (S = 1/3)	36
第26図 SK004 出土遺物実測図 (1) (S = 1/3、一部 1/4)	38
第27図 SK004 (2)・SK011・SP (柱穴) 他出土遺物 (S = 1/3)	39

第24次調査 図版目次

PL. 1 麦野A 24次調査状況全景
PL. 2 調査区北半遺構掘削状況、SD001 遺構掘削状況、SK004 と SB01
PL. 3 SK004、SD001・SD036・SX041、SX002、SX003
PL. 4 SX003、SX050、SK011、SB01 各柱穴
裏表紙写真 挖立柱建物SB01 と貯蔵穴堅穴SK004 (東から)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成 26（2014）年 8 月 20 日、土地所有者様より、福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）に麦野 3 丁目 11 番 25、11 番 62、11 番 33、11 番 60、11 番 59 における共同住宅建設、農業用倉庫建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野 A 遺跡に位置しており、照会地の西側では麦野 A 遺跡第 6・12 次調査が行われている。同課はこれを受けて平成 26 年 10 月 23 日、12 月 5 日に第 23 次調査範囲の試掘調査を行い、平成 27 年 1 月 28 日に第 24 次調査範囲の試掘調査を行った。試掘調査の結果、共同住宅建設部分（第 23 次調査地）では地表面下 105 cm、農業用倉庫建設部分（第 24 次調査地）では地表面下 55 cm で遺構が残存していることが確認された。申請者と同課は文化財保護に関する協議を持ったが、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅が建設される 374 m²、農業用倉庫が建設される 150 m²について、記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。調査は第 23 次調査を平成 27（2015）年 1 月 5 日～同年 3 月 6 日まで、第 24 次調査を平成 27（2015）年 2 月 25 日～同年 3 月 27 日まで実施した。

2. 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成 26 年度・資料整理：平成 28 年度）

調査総括：埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課） 課長 常松幹雄
同課調査第 1 係長 吉武学
同課調査第 2 係長 櫻木義嗣（26 年度）
同課調査第 2 係長 加藤隆也（28 年度）
庶務：埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課） 管理係長 内山広司（26 年度）
管理係長 大塚紀宜（28 年度）
川村啓子（26 年度）
入江よう子（28 年度）

事前審査：埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課） 事前審査係長 佐藤一郎
同課事前審査係長 池田祐司
同課事前審査係長 板倉有大（26 年度）
大森真衣子（28 年度）

調査担当：埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課） 文化財主事 久住猛雄
清金良太

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について施主様をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することができました。ここに深く感謝します。

II. 遺跡の立地と環境

1. 麦野A遺跡の立地

玄界灘に面しており、背後には脊振・三郡山系をひかえる福岡市は、これらより派生する山塊、丘陵によって区画される平野が展開している。東側から柏屋平野、福岡平野、早良平野、今宿平野と呼ばれており、今回報告する麦野A遺跡第23・24次調査区は福岡平野に位置している。福岡平野は脊振山系からの那珂川と、牛頭山地からの御笠川によって形成された沖積平野であり、麦野A遺跡は御笠川とその支流である諸岡川にはさまれた中位段丘上に位置する遺跡である。この段丘は、花崗岩風化礫層を基盤としており、Aso-4と呼ばれる阿蘇カルデラ起源の火碎流による八女粘土層、および鳥栖ローム層とよばれる堆積物からなる洪積台地である。麦野A遺跡はこの丘陵地帯の一角に位置している。

この丘陵上に位置する遺跡には旧石器時代、縄文時代から現在に至るまでの人々の生活の痕跡が刻まれており、それは麦野A遺跡も例外ではない。麦野A遺跡と同じ段丘上には北側では高畠遺跡、板付遺跡があり、南側では麦野B遺跡、麦野C遺跡、南八幡遺跡、雜削隈遺跡が位置しており、浸食によって狭い谷の開析により、八つ手状に舌状の台地を派生させている。南側の遺跡はいずれの遺跡も鳥栖ローム層上面で遺構が検出されることが多い。また、南側に位置するこれらの遺跡は飛鳥時代末から平安時代初頭にかけての遺構が特に多い地域となっている。麦野A遺跡が位置する台地は、南北約12 km、東西約0.4 kmで、南北に細長い立地となっている。また、現在の地表面の標高は約12～17 mを測る。現在は都市化が進み旧状をうかがうことは難しくなっているが、元々は広大な農地であったが、現在は田畠が所々に残っているのみである。

2. 麦野A遺跡と周辺の歴史的環境

周辺で最も古い遺物としては先土器時代の石器などが挙げられる。麦野A遺跡第1次調査、麦野B遺跡第4次調査、雜削隈遺跡第10次調査で検出され新期ローム層中に包含層を検出しているが、いずれも散漫な出土であり、量もわずかであった。南八幡遺跡第12次調査では集中的に分布することが確認されている。台地上の広い範囲にわたって分布することが明らかとなっている。

縄文時代の遺構・遺物としては、各調査において石鐵がわずかに出土したほか、麦野A遺跡第18次調査、麦野B遺跡第3次調査、麦野C遺跡第3次調査では石鐵が出土しているが、晚期の刻目突蒂文期に至るまでの明確な遺構・遺物は少ない状況である。南八幡遺跡第6・7次調査で「落とし穴」とされている土坑が検出されているが、遺物に乏しく時期を明確にするには至っていない。

弥生時代の遺構・遺物としては、麦野A遺跡第18～20次調査において、前期後半～末頃の貯蔵穴、方形の住居址が検出され、台地尾根付近に集落跡、辺縁部に貯蔵穴が造られていたと推測されている。また、麦野C遺跡第1・5次調査において、前期末の方形住居・小児甕棺、後期初頭～後期前葉にかけての方形住居跡が検出されている。また雜削隈遺跡第5次調査、南八幡遺跡第9次調査では方形の堅穴住居が散見される希薄な広がりをみせるが、南八幡遺跡第9次調査ではガラス小玉を伴う住居跡や掘立柱建物が検出され、同第19次調査では連鉄式の銅鑄錫型が堅穴住居から見つかっており、雜削隈丘陵では、南縁から西縁にかけて小規模な工房を持つ集落域が形成されていたのではないかと推測されている。

古墳時代に麦野A遺跡では、明確な遺構は無く、弥生時代から連続して集落が営まれている形跡はなく、古墳時代前期から中期にかけての遺構はほとんどなくなる。古墳時代後期になると、南八幡遺跡

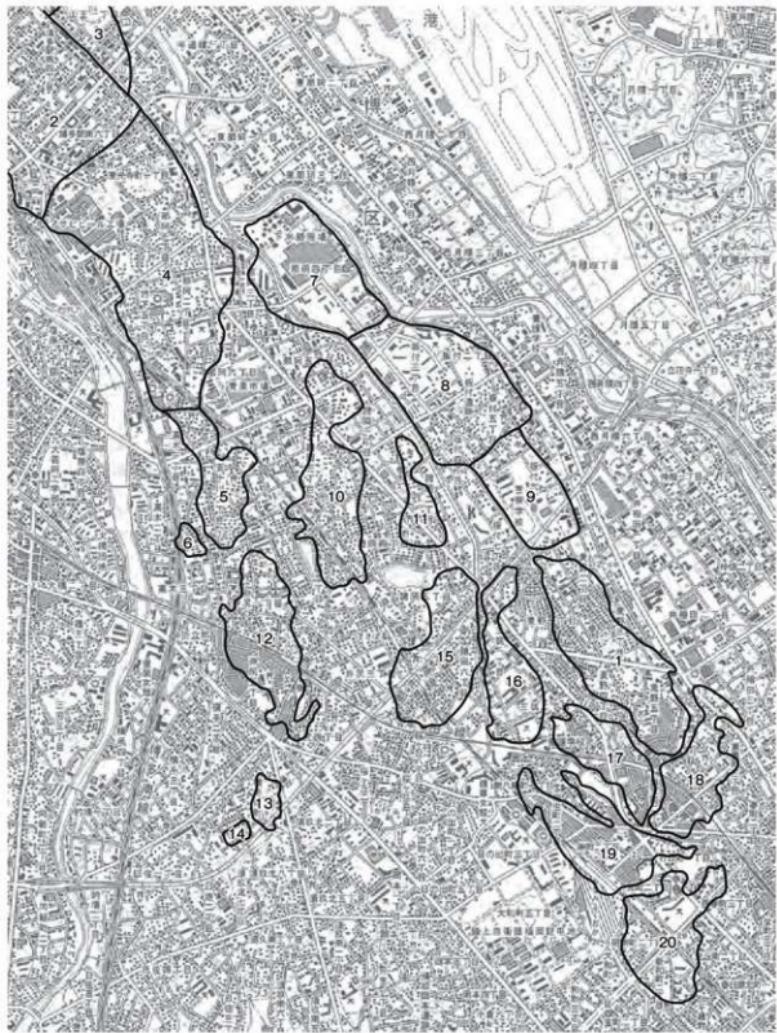
第2・3次調査で住居跡が確認されている。

古代以降になると、遺構・遺物共に増加する傾向をみせ、7世紀後半～9世紀初頭にかけての集落が検出されている。麦野A遺跡第7次調査では、溝・柵列に伴う門跡が検出されており、8世紀初頭～9世紀初頭で2時期に区分されている。麦野C遺跡第5次調査では、堅穴住居45軒以上、掘立柱建物2棟以上と多数の建物跡が検出されている。東に位置する井相田C遺跡の間には、大宰府から北方向へのびる官道が位置している。この官道に麦野C遺跡が近接した場所に位置しており、雜餉隈遺跡、南八幡遺跡、麦野A遺跡では散漫な分布の住居址が麦野C遺跡第1・5・13次調査では70棟と濃密な分布をみせるのは官道に対しての立地条件があげられており、住居は数回建て替えが行われるなど、長期的に集落が展開していたことがうかがえる。雜餉隈遺跡第9次調査では、8世紀後半頃のL字形に配置する掘立柱建物が2棟検出されている。周辺には大宰府、水城、大野城、大宰府と鴻臚館をつなぐ官道などの重要な施設が多くあり、これらの維持・管理などにあたる人々の居住スペースなのではないかと推測されている。また同5次調査では50棟を超す堅穴住居跡が検出されている。しかし、古代の遺構は9世紀に入ると急速に減少しており、麦野A遺跡の第3・15次調査で井戸や土坑が検出されており、柱穴から掘立柱建物の存在が考えられている。

中世は麦野A遺跡第1次調査で15～16世紀にかけての掘立柱建物が検出され、また第4次調査では12世紀後半から13世紀初頭の掘立柱建物・土坑などがみつかっている。麦野C遺跡内に位置する日吉神社境内には嘉暦3（1328）年の銘を刻む板碑があり、中世の集落が丘陵上に存在していた可能性がある。今回第23次調査で報告する溝については、第18次、第20次調査では堀状遺構であると指摘され、北西、南西の第6次、第9次、第23次調査出土の溝と併せて方形のプランを持っている。遺物の出土がわずかではあるが、戦国期の陶磁器類が出土している。近世の編纂物である「豊前覚書」には、天正9（1581）年に戸次鑑連が麦野村に軍勢を置いたとする記事がみられ関連が注目される。

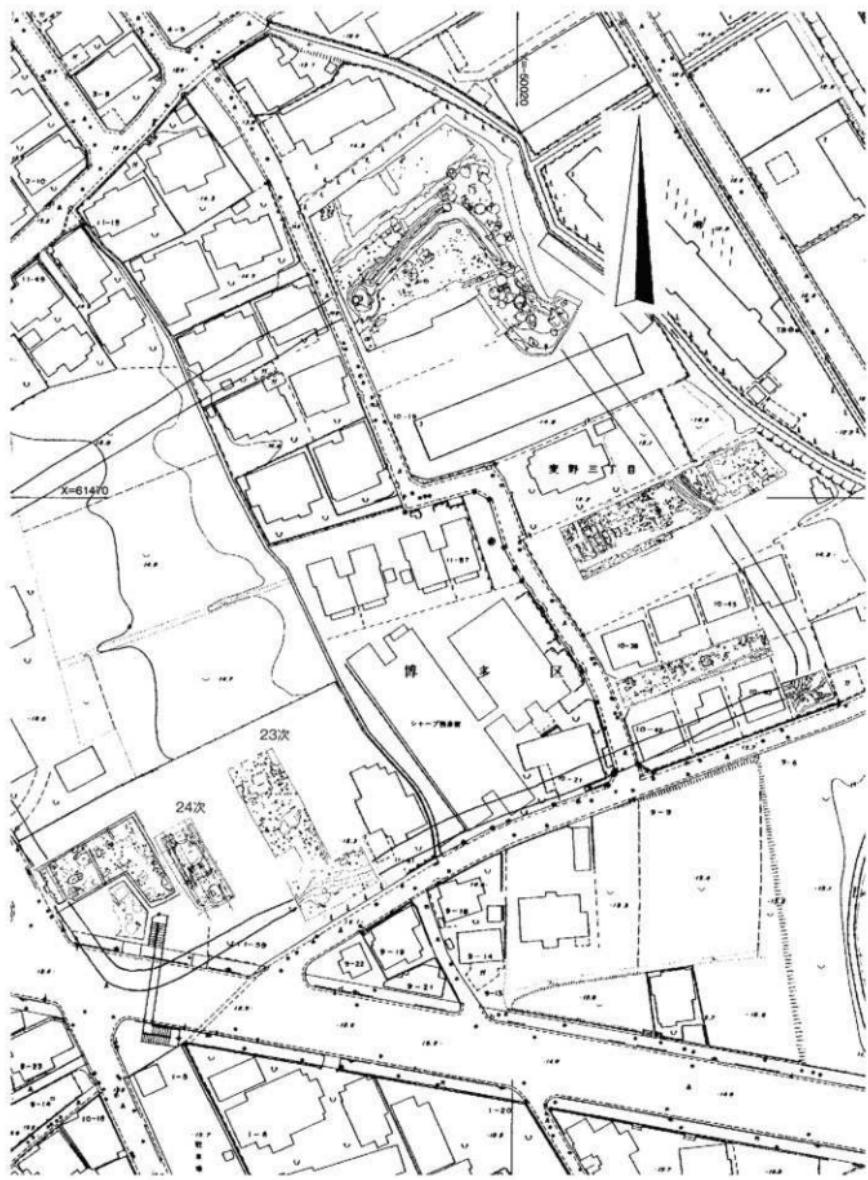
次数	調査番号	所在地	調査面積 (m ²)	報告書	時期	遺跡の概要
1	8232	麦野 1-28-56	600	102集	中世後半	中世：井戸、掘立柱建物
2	8332	麦野 5-24	80	1162集	奈良：井戸	奈良：堅穴住居、土坑
3	9116	麦野 1-4-23	247.4	225集	古代、中世	中世：堅穴住居、土坑
4	9316	麦野 1-27-3、5	134	999集	古代	中世：堅穴住居、土坑
5	9412	麦野 1-27-1、2	6	年報9	古代	中世：井戸、土坑
6	9824	麦野 3-11-29	224	867集	古代、中世	奈良：堅穴住居、土坑 平安：井戸、土坑 中世：土坑、礫
7	9972	麦野 5-2-33、36	400	867集	古代、中世	奈良：平安：井戸、掘立柱建物 中世：堅穴住居、土坑
8	5	麦野 3-10-10	178	774集	古代	古代：堅穴住居、掘立柱建物
9	31	麦野 3-10-10	622	6414	中世後半	中世：土坑、礫
10	61	麦野 5-2-33	405	719集	古代、近世	古代：堅穴住居、掘立柱建物 近世：井戸、礫
11	139	麦野 4-11-5	130	867集	縄文、古代	縄文：落とし穴
12	126	麦野 3-11-28、37、81～84	80	年報16	古代	奈良：堅穴住居
13	156	麦野 2-1-8	250	867集	古墳、古代	古墳：土坑
14	367	麦野 5-3-30	260	859集	古代	平安：堅穴住居、掘立柱建物
15	536	麦野 5-1-41	91.4	年報20	古代	古代：堅穴住居、掘立柱建物
16	529	麦野 1-29-12	26	年報20	古代	古代：堅穴住居、土坑
17	619	麦野 5-1-40、34、35	336	年報21	古代	古代：堅穴住居、土坑
18	704	麦野 3-10-12	1565	1054集	先史、古代、中世	先史：堅穴住居、落とし穴 古代：堅穴住居
19	724	麦野 5-8-27、8-30、34	3248	1055集	先史、古墳残照、近世	古墳：土坑
20	755	麦野 3-10-11 他	5155	1056集	先史、古代、中世	先史：堅穴住居、落とし穴 古代：堅穴住居
21	863	麦野 5-3-30、41	134.2	未刊	古代	古代：堅穴住居
22	1318	麦野 2-17-20	110.05	1288	先史、古墳、古代	古墳：土坑
23	1441	麦野 3-11-25、11-31、11-40、11-62	347	本報告	古代、中世	古代：柱穴 中世：戦国時代の溝
24	1446	麦野 3-11-59	1554	本報告	古代、中世	古代：遺物のみ
25	1524	麦野 3-2-6	32	未刊	古代	中世：溝、穴坑、掘立柱建物、円み区遺構
26	1602	麦野 2-3-1	84	未刊	古代	

第1表 麦野 A 遺跡調査一覧表

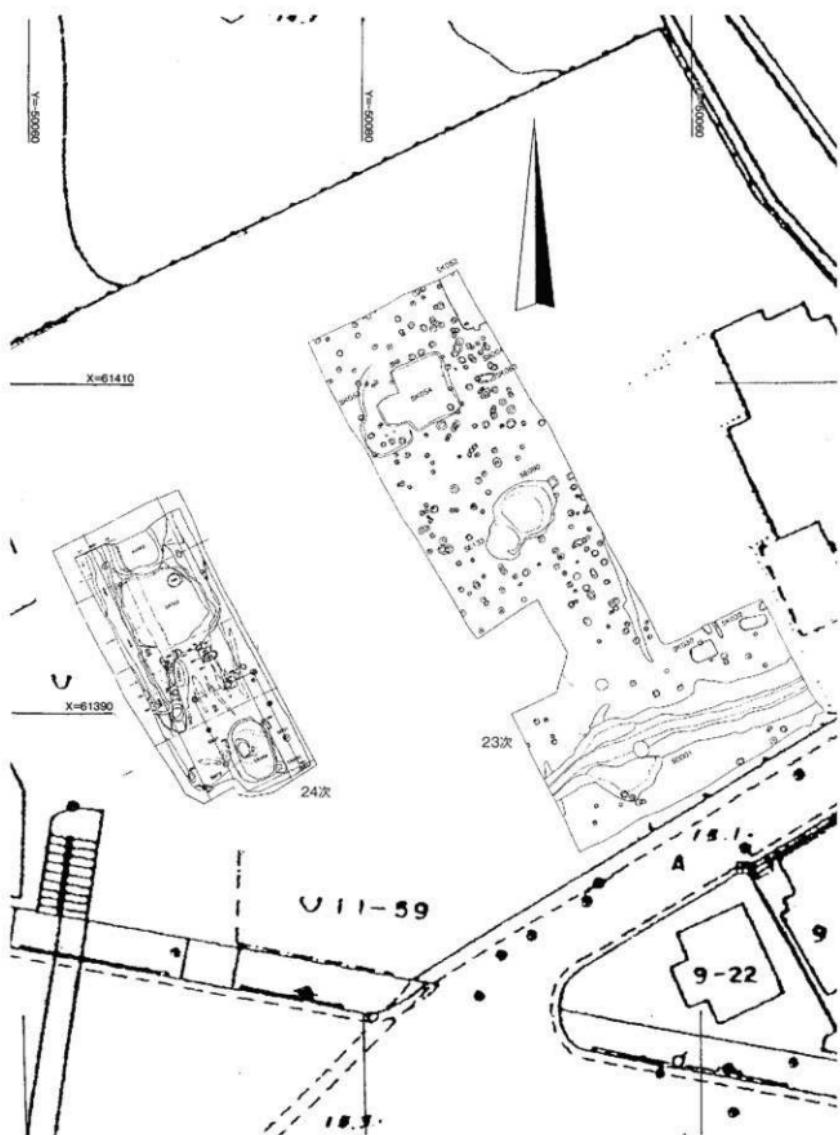


- | | | | | | |
|----------|----------|---------|----------|----------|----------|
| 1 麦野A遺跡 | 2 比恵遺跡群 | 3 山王遺跡 | 4 那珂遺跡群 | 5 五十川遺跡 | 6 井尻A遺跡 |
| 7 那珂君休遺跡 | 8 板付遺跡 | 9 高畠遺跡 | 10 諸岡A遺跡 | 11 諸岡B遺跡 | 12 井尻B遺跡 |
| 13 寺島遺跡 | 14 笠抜遺跡 | 15 岩原遺跡 | 16 三筑遺跡 | 17 麦野B遺跡 | 18 麦野C遺跡 |
| 19 南八幡遺跡 | 20 雜鈴隈遺跡 | | | | |

第1図 麦野A遺跡位置図（1/25,000）



第2図 調査区位置図 (1/1,000)



第3図 第23・24次調査区位置図（1/300）

III. 第23次調査の記録

1. 概要

今回報告する麦野A遺跡第23次調査区は、福岡市博多区麦野三丁目11-25、11-26、11-33、11-60、11-59に所在し、調査前の現況は標高約13.6mを測る家屋解体後の平地であった。調査地点は遺跡の中央部に位置し、隣接する西側では第6、12、24次調査が行われており、東側では第8、9、20次、北東側では第18次の各調査が実施され、更にその周囲でも調査が進んでいる。

本調査区は、周辺の標高と比較して最高点付近に位置しており、試掘の段階で戦国時代とされる溝の存在が明らかとなつた。

本調査区は表土および客土を除去し約12.4m付近で鳥栖ローム層に起因する遺構面があり、遺構面はほぼ平坦であった。また調査区には古井戸があり、今回の調査では古井戸は除く調査区を設定した。調査区の南側は、溝、土坑を除いて遺構密度は希薄であるが、調査区の北側にいくと井戸、土坑などを検出し遺構密度が濃かつた。遺構面の標高は南西端部で12.4m、北東端部で12.5mを測るはほぼ平坦な地形であった。

遺構検出は遺構面上までを重機で剥ぎ取って実施したが、以下は人力によって作業を行った。今回の調査では、古代から戦国時代までの掘立柱建物、溝、井戸、土坑等を主体として確認できた。出土遺物量は、コンテナケースにして6箱である。

発掘調査は平成27(2015)年1月5日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りから開始し、翌日に発掘器材やリース器材を搬入した。その後、外柵設置や壁面清掃、遺構面保護、世界測地系によるトラバース杭の設定等を実施し、7日から遺構検出を開始した。その後順次、南西側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、平板、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した2月27日に高所作業車による全体写真の撮影を行った。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影、片付け、重機による埋め戻し等を終え、3月6日に第23次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、「I. - 1. 調査に至る経緯」のとおり、374.0m²であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴の施設については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にP1から順に番号を付した。

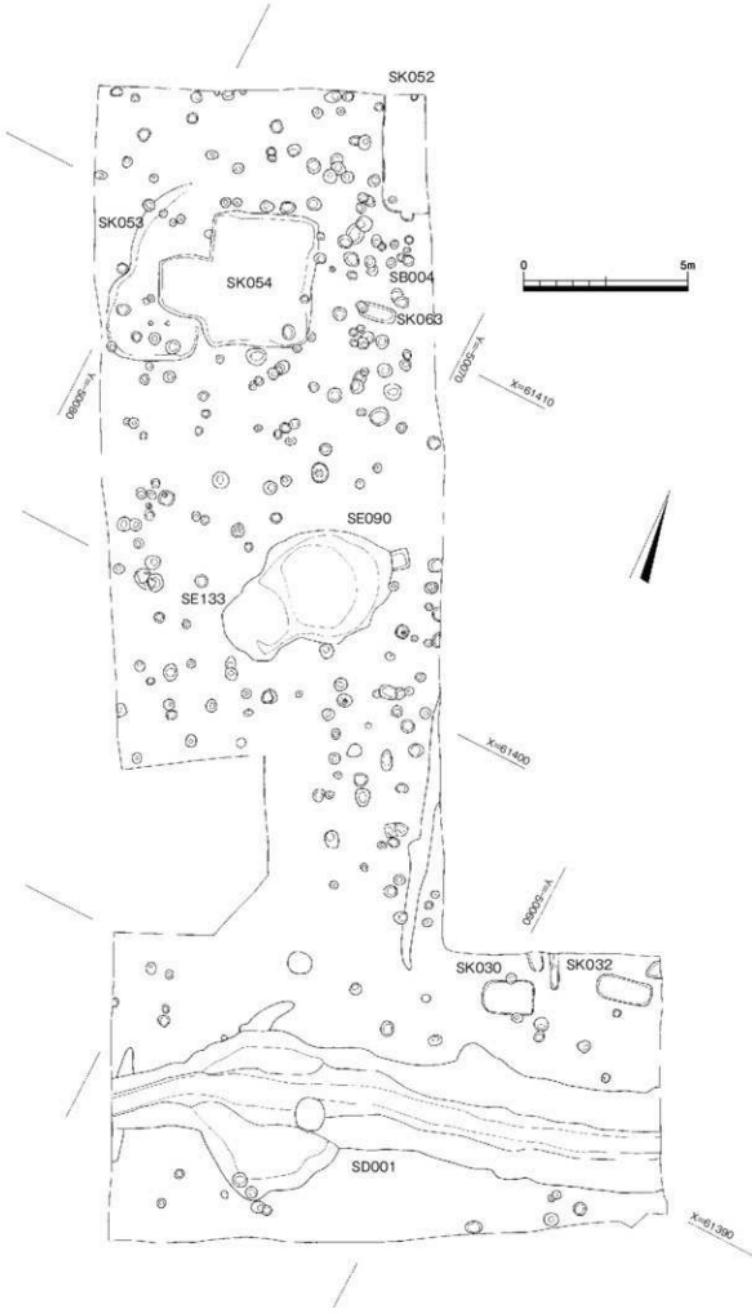
2. 遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における日本測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字(西から東にA~D)と数字(北から南に1~4)の組み合わせによるグリッド表記を用いる(第4図)。

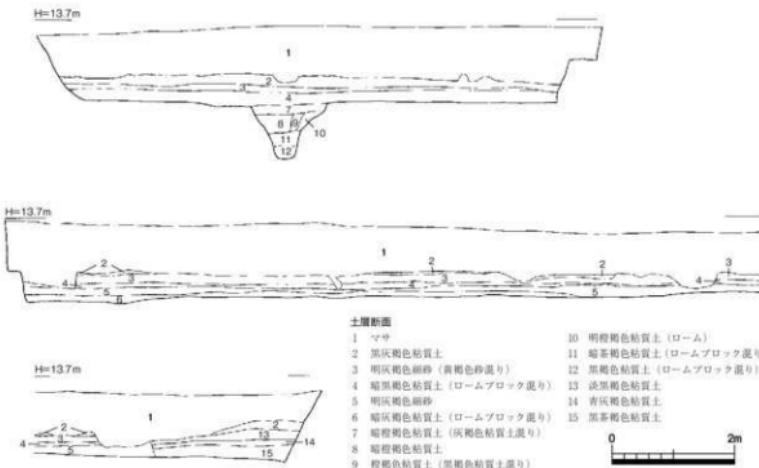
1) 掘立柱建物 (SB)

調査終了後に抽出した1棟の掘立柱建物について報告する。今回報告する掘立柱建物の周辺には多数のビットがあり、その他井戸周辺にはビットの中に石が敷いてあるものがみられた。建物としてまとまるか検討を行ったが復元には至らなかった。

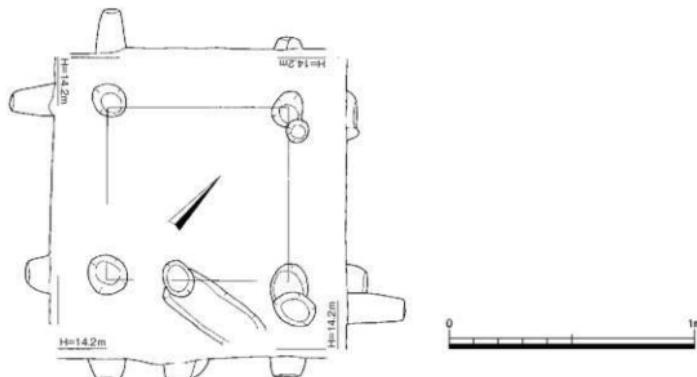
SB044(第4、6図) 調査区のB-1で検出した。1間×1間の建物である。柱間の長さは1.4~1.5mである。柱穴は円形・楕円形であり、径0.28~0.32m、深さ0.1~0.4mを測る。覆土は茶



第4図 第23次調査区全体図 (1/150)



第5図 土層断面実測図（1/80）

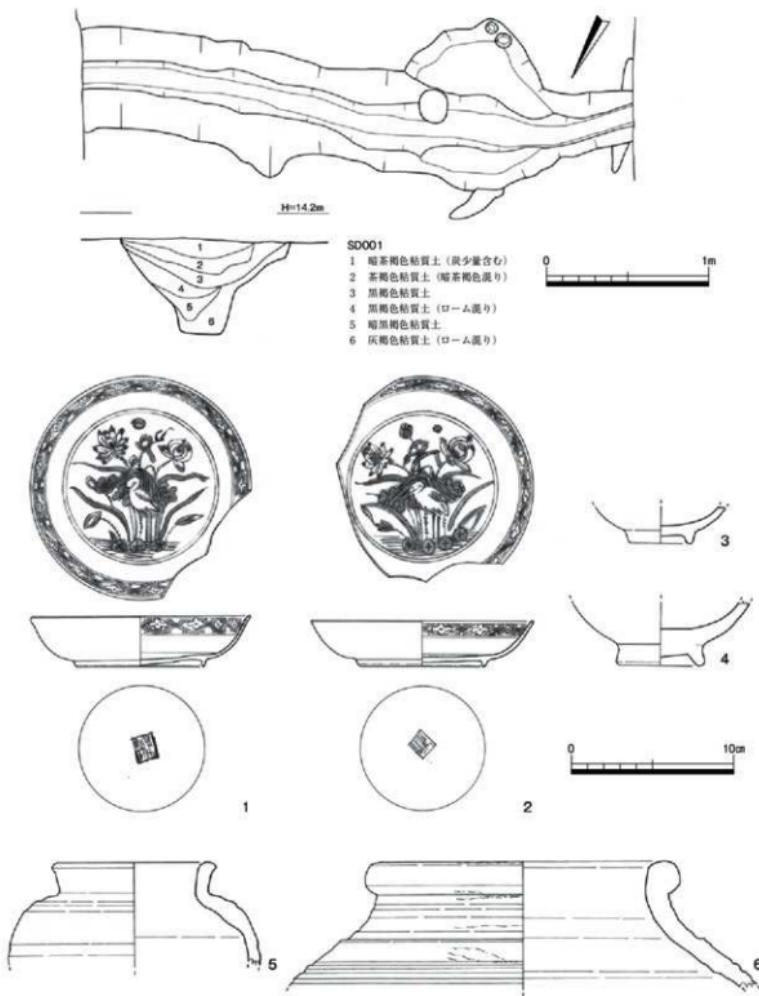


第6図 SB044 実測図（1/40）

褐色粘質土を主体とする。

2) 溝 (SD)

SD001 (第4、7、8図) 調査区のC-3、4、D-3、4で検出した。北東-南西方向に伸びる溝で、両端は調査区外に伸びる。上面幅約2.2m、底面幅約0.45m、深さ約1.2mを測る。断面は箱樋状を呈している。土層観察によると少なくとも3回掘り直しがあったのではないかと考えられる。また、同じく覆土に水成堆積物が認められないことから、空堀であったと考えられる。



第7図 SD001 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第4、7図）1、2は肥前磁器の染付皿である。1は口径13.5 cm、底径8.0 cm、高さ3.0 cmである。2は口径約13.5 cm、底径7.6 cm、高さ3.0 cmである。1、2は内面が口縁部に四方擗文、見込みに花鳥文を持ち、高台内には銘が書かれている。高台の端部は露胎である。3、4



第8図 SD001出土遺物実測図（1/3）

は椀である。3は底径3.8 cm、高さ2.1 cmが残る。内面外面共に回転ナデで仕上げる。4は底径5.0 cm、高さ約4.0 cmが残る。内面外面は回転ナデ、高台内は回転ヘラ削りが確認できる。3・4は共に近世である。5、6は陶器の壺である。口径約10.0 cmで、内面外面共に回転横ナデが確認できる。また、内側が黒ずんでいる。6は口径約19.2 cmで、内面外面共に横ナデで仕上げる。頭部付近には自然釉がかかり、胴部には沈線が確認できる。7は瓦質の深鉢である。口径は約28.0 cmである。内面は指押え、ナデ、口縁部にかけて横ナデがみられる。また突帯には刻み目が確認できる。8、9は土師質の擂鉢である。8は底径約12.0 cm、内面には粗く密な摺目が残る。9は土師質で口径約30.0

cm である。内面には 5 本単位の摺目、内面上部には粗いハケ目、口縁部から外面にかけてナデが確認できる。10～12 は土師質の茶釜である。10 は口径約 10.0 cm、外面肩部にはスタンプ文がみられる。内面下部は強い横ナデがみられる。11 は口径約 15.0 cm、器面は磨滅しており、内面に指押えが確認できるのみである。外面にはスタンプ文が確認できる。12 は口縁部からつまみにかけての小片が残る。つまみには径 0.8 cm 程の穿孔が確認でき、内面は指押えがみられる。13 は龍泉窯の青磁碗である。底径 6.3 cm、高さ約 2.2 cm が残る。釉薬は内面外面には見られるが、高台底部は釉薬をかきとっている。また高台内は回転ペラ削りがみられ、露体である。14 は土師質の擂鉢である。口径約 25.0 cm、底径約 13.0 cm、高さ 10.2 cm である。内面には 5 本単位の摺目がみられ、内面全体をハケ目で仕上げる。外面はタタキの後、下部ではナデが、底部ではナデが確認できる。15 は近世陶器の鉢である。口縁部は無釉であるが、内面外面共に白く濁った釉薬のようなものがかかる。16 は土師質の茶釜である。内面外面共にナデ、もしくは指押えで仕上げる。また、把手部には径 0.8 m の穿孔がみられる。17 は平瓦である。外面はタタキ、内面には布目痕が残る。

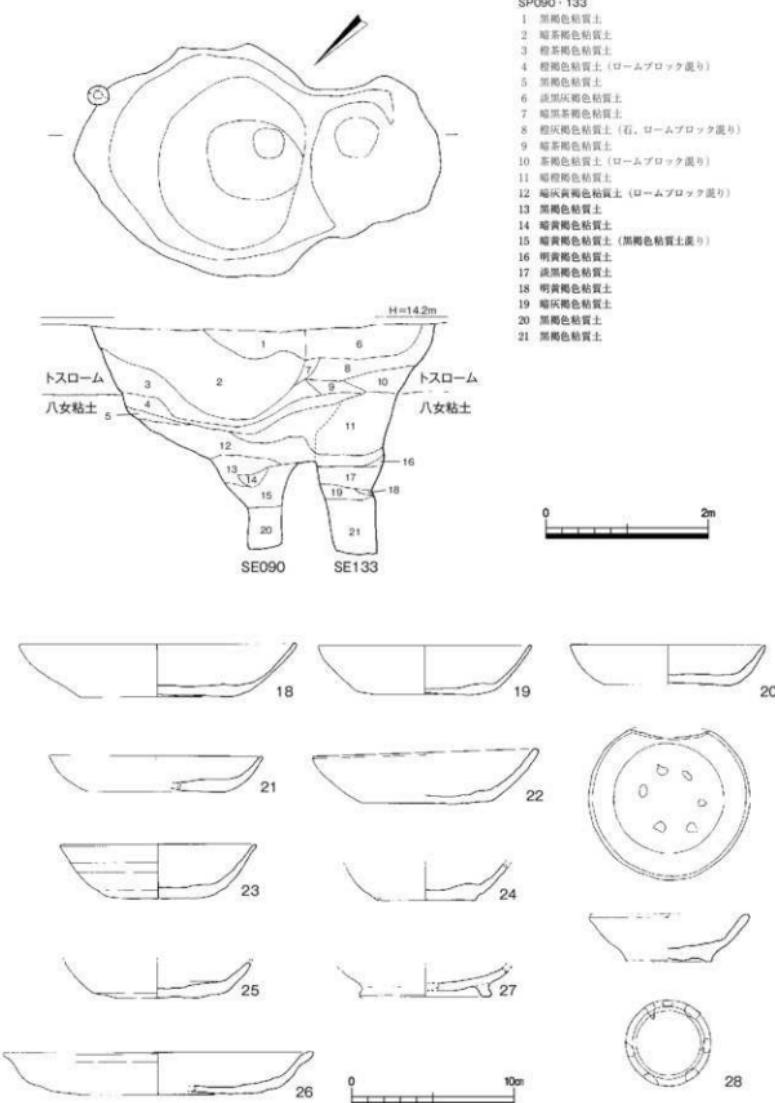
3) 井戸 (SE)

SE090、133 (第 4、9、10、11 図) B-2. 3、C-2. 3 で検出した。初めは SE090 のみと思われたが、掘方が広かったことから 2 基の井戸があることも想定して掘進めていた。土層図の 12 を掘り上げた時にもう 1 基の井戸がみつかり SE133 とした。なお、SE133 の方が SE090 よりも古い。

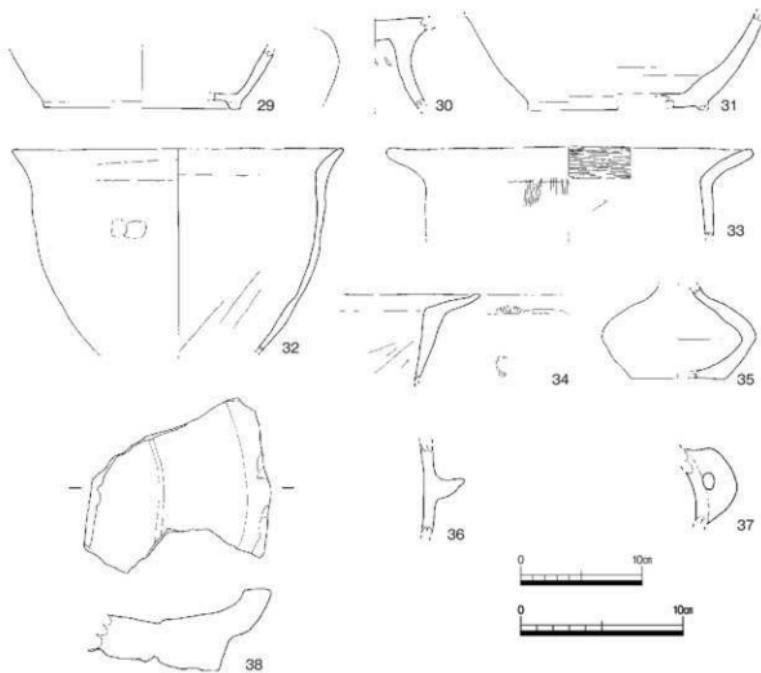
SE090 標高約 12.3 m から水が湧き出す円形の井戸である。SE133 を埋めて新しくすぐ横に掘った井戸で、土層図の 12 より上は SE090、SE133 ともに埋まったようである。SE090 は深さ 2.7 m、幅 4.2 m である。埋没時期としては 1300 年頃と考えられる。

出土遺物 (第 9、10 図) 18. 20～25 は土師器の壊である。18 は口径 16.6 cm、底径 9.4 cm、高さ 3.2 cm である。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。19 は須恵器の壊である。口径 13.0 cm、底径 5.6 cm、高さ 3.0 cm である。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。20 は口径 12.0 cm、底径 8.0 cm、高さ 2.4 cm を測る。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。21 は口径約 13.0 cm、底径約 8.4 cm、高さ 2.2 cm である。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。22 は口径 13.8 cm、底径 5.6 cm、高さ 2.8～3.4 cm を測る。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。23 は口径 12.0 cm、底径 4.0 cm、高さ 3.3 cm である。回転ナデで仕上げ、底部はペラ切りである。24 は底径 6.0 cm、残存高は約 2.3 cm である。回転ナデで仕上げ、底部はペラ切りである。25 は底径 8.0 cm、残存高は約 2.2 cm である。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。27 は瓦器壠で底径約 8.0 cm、残存高は 1.7 cm である。回転ナデで仕上げる。26 は須恵器の壊 (盤) で口径約 19.0 cm、底径約 10.2 cm、高さ 2.6 cm であり、回転ナデで仕上げる。28 は高麗時代の雜釉陶器の碗である。口径 9.8 cm、底径 5.2 cm、高さ 2.9 cm である。胎土は淡灰褐色であり、表面は施釉されている。また、内面、外面共に 6～7 か所の目跡が確認できる。29 は須恵器の壊であろうか。底径約 12.0 cm、残存高約 3.7 cm である。回転ナデで仕上げる。30 は須恵器の高壊である。残存高 5.6 cm である。内面上部はシボリ、その下はナデである。外面はナデが確認できる。31 は須恵器の壺である。底径約 11.0 cm、残存高 5.9 cm である。内面外面共に回転ナデで仕上げる。32 は土師器の壺である。口径約 20.2 cm、残存高約 12.4 cm である。内面上部はナデが確認できる。外面はナデ、指押えがみられ、煤の付着も確認できる。33 は土師器の壺である。口径約 30 cm、残存高が約 7.4 cm である。内面の口縁部から頭部にかけてハケ目、それより下は削りが確認できる。外面は口縁部から頭部にかけてナデ、それより下はハケ目がみられる。34 は土師器の壺である。残存高は 5.3 cm である。内面は削り、外面はハケ目が確認できる。35 は須恵器のハソウである。底径約 5.5 cm、胴部最大径は約 9.4 cm、残存高は 5.5 cm である。

- SP090・133
- 1 黒褐色粘質土
 - 2 茶系褐色粘質土
 - 3 褐茶褐色粘質土
 - 4 褐褐色粘質土（ロームブロック混り）
 - 5 黑褐色粘質土
 - 6 深灰褐色粘質土
 - 7 褐黑茶褐色粘質土
 - 8 褐褐色粘質土（石、ロームブロック混り）
 - 9 茶系褐色粘質土
 - 10 黑褐色粘質土（ロームブロック混り）
 - 11 褐褐色粘質土
 - 12 深灰黄褐色粘質土（ロームブロック混り）
 - 13 黑褐色粘質土
 - 14 褐黃褐色粘質土
 - 15 褐黃褐色粘質土（黒褐色粘質土混り）
 - 16 明茶褐色粘質土
 - 17 深茶褐色粘質土
 - 18 明茶褐色粘質土
 - 19 褐褐色粘質土
 - 20 黑褐色粘質土
 - 21 黑褐色粘質土



第9図 SE090・133 (1/40) およびSE090出土遺物実測図 (1/3)



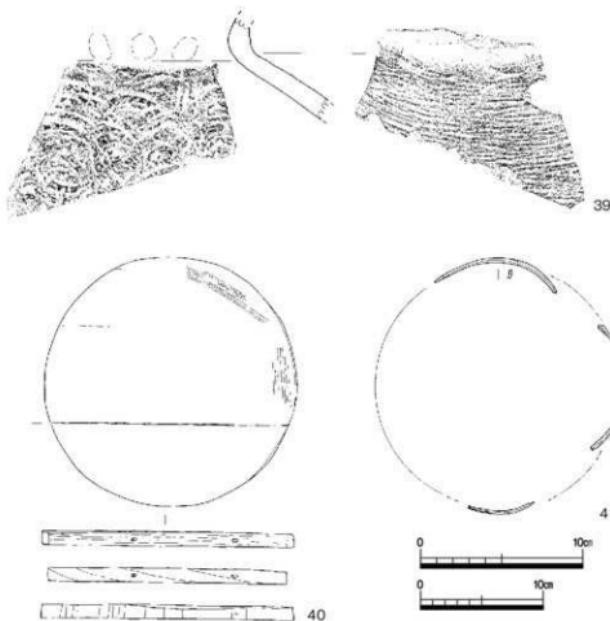
第10図 SE090出土遺物実測図 (38は1/4、他は1/3)

内面外面共に回転ナデで仕上げる。今回の調査では穿孔部分は出土しなかった。

36は土師質の釜である。残存高は5.6cmである。突帯の先端が黒く焼けている。37は土師質の釜である。残存高は約47cmである。内面には指押えが確認でき、外面の穿孔は1.0cmを測る。38は茶臼の下白であろうか。直径約36.0cmを測る。内面、外面は綺麗に面取りをしているが、底部は面取りが見られない。

SE133 標高約122mから水が湧き出す井戸である。土層の体積からSE090よりSE133の方が古い。深さ28mの井戸で、掘方はSE090と重複しているため不明である。年代としては、SE090よりも古い。

出土遺物(第11図)39は須恵器の壺である。残存高は約6.2cmで、胎土は緻密である。内面頸部は指押えの後ナデ、頸部から下は同心円状の当て具痕がみられる。外面頸部はナデ、頸部から下は横方向の平行タタキである。40、41は曲物である。40は径20.8×20.5の円形で厚さが1.2cmである。2枚の板で構成され、板の縫ぎ目には 0.5×0.2 cm程の穴が2か所ずつみられ、細い棒状の木で固定していたのがうかがえる。また、側面には削り痕が確認できる。41は樹皮でできており、木製品(曲物)の固定に使用したものであると考えられる。



第11図 SE133出土遺物実測図 (40、41は1/4、39は1/3)

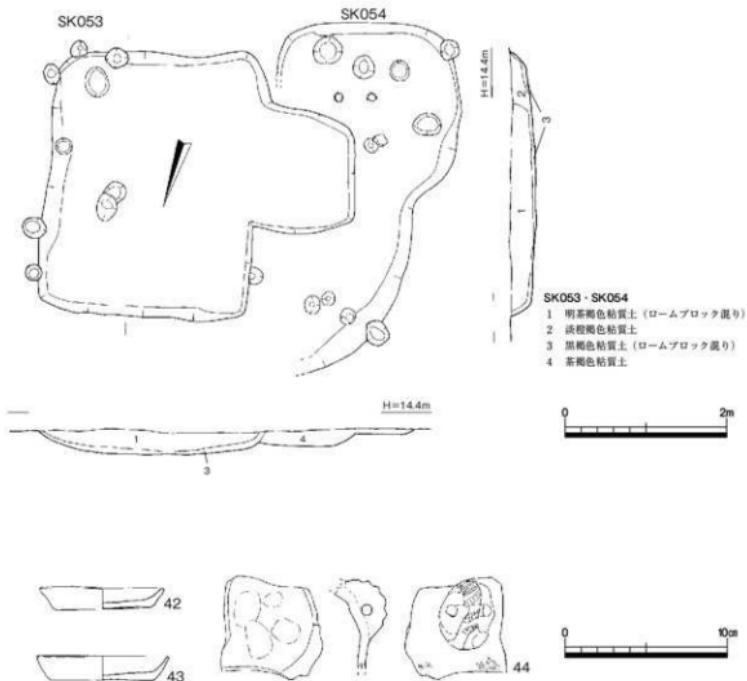
4) 土坑 (SK)

SK053、054 (第12図) SK053とSK054は一部が重なるように検出された。SK053は南北3.3m×東西3.55mを測る、T字型の土坑である。SK053の年代は1300年代と考えられ、SK054はそれよりも後の年代と考えられる。

出土遺物 (第12図) 42、43は土師器の小皿である。42は口径7.5cm、底径5.8cm、高さ1.4cmである。調整は不定方向のナデが全面に認められ、底部は糸切りである。43は口径8.0cm、底径6.2cm、高さ1.5cmを測る。調整は回転ナデであり、底部には糸切りが認められる。44は土師質土器の釜の把手部分が残る。内面はナデ、外面下部はタタキの後ナデ、把手部分はナデの後に刻み目を施す。以上の3点はいずれもSK054からの出土であり、SK053から出土したものは細片ばかりであった。戦国期の土坑である。

SK052 (第4、13図) B-3で検出した。初め竪穴住居かと思われたが、掘り進めていくと、陶磁器辺が出てきたため、土坑であると判断した。埋土は暗茶褐色粘質土であり、東に向かって深くなっている。

SK030 (第4、13図) C-3、D-3で検出した。幅0.79m、長さ1.28m、深さ0.3mを測る土坑であり、埋土は淡茶褐色粘質土(ローム混り)である。陶磁器片が出土したが固化はできなかった。



第12図 SK053・054実測図およびSK053出土遺物実測図（1／3）

SK032（第4・13図）D-3で検出した。幅0.6m、長さ1.4m、深さ0.22mを測る。SK030の幅を小さくしたような形である。埋土はSK030と同じく淡茶褐色粘質土（ローム混り）であり、一度に埋まったと考えられる。

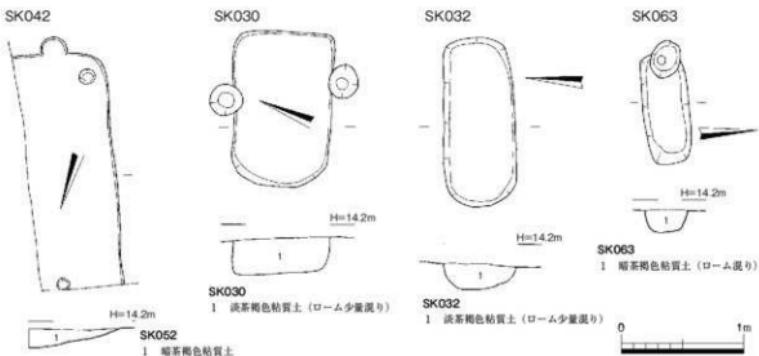
SK063（第4、13図）B-1で検出した。幅4.2m、長さ約0.9m、深さ0.18mの土坑である。これも同じく埋土は暗茶褐色粘質土であり、一気に埋められたのではないかと考えられる。

5) その他の遺物

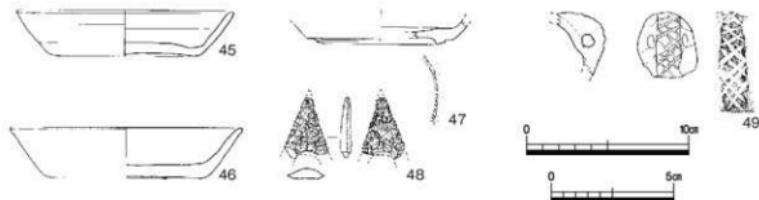
SP089（図4）B-2で検出した。45は土師器の坏である。復元口径約13.4cm、底径8.7cm、高さ29cmである。内外面ともに回転ナデで仕上げ、底部には糸切りがみられる。13世紀代のものである。

SP079（図4）B-2で検出した。46は土師器の坏である。復元口径約14.0cm、底径9.0m、高さ3.1cmである。内外面ともに回転ナデで仕上げ、底部には糸切りがみられる。年代はSP089と同じく13世紀代と考えられる。

SP075（図4）B-1で検出した。47は須恵器の坏身である。復元高台径6.8cm、高さ約1.7cm



第13図 SK030・032・052・063 実測図 (1 / 40)



第14図 ピット・遺構検出時出土遺物実測図 (1 / 3)

が残る。内外面ともに回転ナデで仕上げ、高台部分には刻目が残る。

SP097(図4)B-2で検出した。48は黒曜石の石鎌である。長さ約25cm、幅約1.8cm、厚さ0.4cmが残る。

遺構検出時出土遺物49は土師質の土器であり、釜の把手部分である。内面はナデ調整、外面には格子状の刻み目が確認できる。

3. 結語

SD001について

SD001は16世紀代に位置付けられ、第6、9、18、20、23次では同じように中世後期に掘削された溝がひろがる。9次調査は報告が未刊であり、詳しいことはわからないが、第6、18、20、23次についてみていくこととする。

第6次調査 SD14

第6次調査区の西端で検出し、両端とも発掘区外へ伸びる。幅3m、深さ90cmである。底は平らで箱堀の形状をなす。中世後期に掘削され、近世以降に埋没したと考えられる。上層は近世以降の堆積である。

第18次調査 SD04

第18次調査区の中央から南部にかけて検出した溝である。幅は2.5m～7mを測り、深さは深い部分では2mと非常に大規模な溝である。L字形を呈し、溝の角が検出されている。断面は逆台形を呈しており、複数回の掘り直しされたようであり、漏水していた状況はうかがえない。おそらく屋敷地を開む区画溝である。

第20次調査 SD008

第20次調査区の西側の落ち際に位置する溝で、北西～南東方向に直線的に延長し、両側は調査区外に伸びる。上面幅30～35m、底面幅0.4m前後、深さ1.7m前後を測り、断面は箱堀状を呈する。壁面には、テラスや段が複数認められたが、土層観察によると数度の掘り直しによるものと考えられる。また、覆土には水成堆積物が顕著に認められないことから、空堀であった可能性が高い。出土遺物から16世紀代の溝に位置付けられる。

第23次調査 SD001

第23次調査区の南側で検出された。北東・南西方向に伸びる溝で、両端は調査区外に伸びる。上面幅約22m、底面幅約0.45m、深さ約1.2mを測る。断面は箱堀状を呈している。土層観察によると少なくとも3回掘り直しがあったのではないかと考えられる。また、同じく覆土に水成堆積物が認められないことから、空堀であったと考えられる。出土遺物から16世紀代の溝に位置付けられるが、上層からは江戸期の磁器が出土しており、そのころまで屋敷として使用されていた可能性が考えられる。

以上、堀の一部を検出した調査を見てきたが、東辺については第9、18次で屈曲部が検出されており、方形区画の東辺を復元することができる。西辺については、第6次調査出土の溝を想定しているが、溝は箱堀ながらも底面の幅が広いが、同時期の遺物が出土しているためSD14を当てて復元した。

第20次調査報告でも記載されているが、復元区画は内法で南北約110m、東西約150mを測る規模となる。溝の掘削時期や形状、出土遺物などから戦国期の城館の周りに掘削された空堀であった可能性が高い。また、第6次調査の西側の道、第23次調査の南側の道で区切られ、そこから堀・内部へと続いているのではないか。なおそこで注目されるのは、近世の編纂物『懲前覚書』の記事である。天正9（1581）年に戸次鑑連が筑紫広門の那珂郡侵入に備えて、麦野村に軍勢をおいたという記事が想起されるが、それを裏付ける資料に欠き確証は無い。第23次調査では溝、井戸、土坑と戦国期の遺構が確認されたが、今後さらに城館構造を明らかにしていく必要がある。

（参考文献）

- 『麦野A道路5』福岡市埋蔵文化財調査報告第1054集 2009 福岡市教育委員会
『麦野A道路7』福岡市埋蔵文化財調査報告第1056集 2009 福岡市教育委員会



(1) I 区全体写真（東から）



(2) II 区全体写真（南東から）



(3) SD001 (北東から)



(4) SD001 土層断面 (北東から)



(5) SE090・131 完掘状況（北西から）



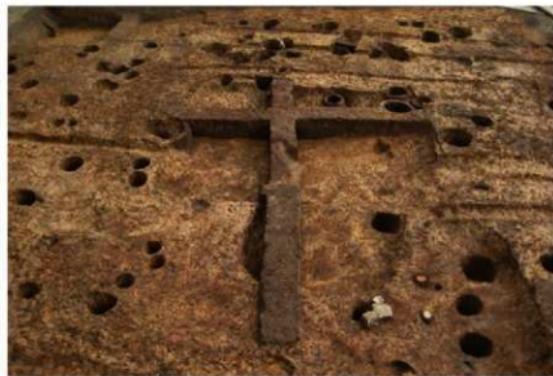
(6) SE090 木製品出土状況（北西から）



(7) SE090・131
上部土層断面
(北西から)



(8) SE090・131
下部土層断面
(北西から)



(9) SK053・054
土層断面 (南西から)



(10) SK053・054 土層断面（北西から）



(11) SK030 土層断面（南西から）



(12) SK030 完掘状況（南西から）



(13) SK052 土層断面（北西から）



(14) I区壁面土層（北東から）



(15) I区壁面土層（北東から）



IV. 第24次調査の記録

1. 調査の概要

麦野A遺跡第24次調査区は、福岡市麦野三丁目11番59に所在する発掘調査面積155.4 m²の範囲である。先行して行われていた第23次調査の西隣の敷地であり（本書6頁第2図参照）、第23次調査の原因となった共同住宅建設に引き続き、23次と同一の土地所有者が農業用倉庫を建設することになり、協議の結果、国庫補助金の適用により発掘調査を実施することになったものである。本調査は平成27年（2015年）2月23日より開始し、同年3月27日に終了した。本調査開始時は、東隣の23次調査がまだ行われており同時併行の作業になったため、当初は表土掘削の廃土置場に若干の苦慮が生じることもあったが、23次調査の終了（3月6日）後は廃土置場に余裕が生じ、問題なく発掘調査を進行することができた。調査地点は、麦野A遺跡の立地する略南北に延びる段丘尾根からやや東に下る地点にあるが、現在は広い平坦地になっている。周囲は畠地ないし宅地である。調査区の周囲標高は、およそ15.0 m前後で一定している。発掘調査では、調査区中央から南側では地表下-45 cm～55 cm、また北側では-60～70 cm前後で地山の鳥居ローム上面となり、遺構を検出した。ただし第16図の調査区北壁土層断面図に見るように、中世後半期以降の溝状遺構などは地山ローム面よりも上から掘り込んでいる部分が遺存していることがあり、今後の周辺の調査では注意を要する。

検出遺構には、溝状遺構、大型竪穴（土坑）状遺構、凹み（落ち込み）状遺構（池？）、土坑、足元掘込土壤墓状遺構、柱穴、掘立柱建物である（第15図）。遺物の出土は総量でパンケース3箱分が出土した。飛鳥時代から中世末期（戦国時代）および近世初期までの土師器、須恵器、黒色土器、輸入陶器、国産陶磁器、瓦質土器、瓦などが出土した。検出遺構のほとんどは中世（～近世初期）の遺構であり、土色・土質からも確実な飛鳥～奈良時代の遺構はほとんどないと考えられる。「足元掘込土壤墓状遺構」としたものは、覆土の土色・土質から古墳時代以前、おそらくは弥生時代の可能性があるものだが、遺物が伴わず確証がない。いずれにしても飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器は比較的多く含むが、ほとんどが混入品である。しかし当地にその時期の遺構が分布していたわずかな証拠になりうる。ただし確実な弥生土器の出土は無かった。

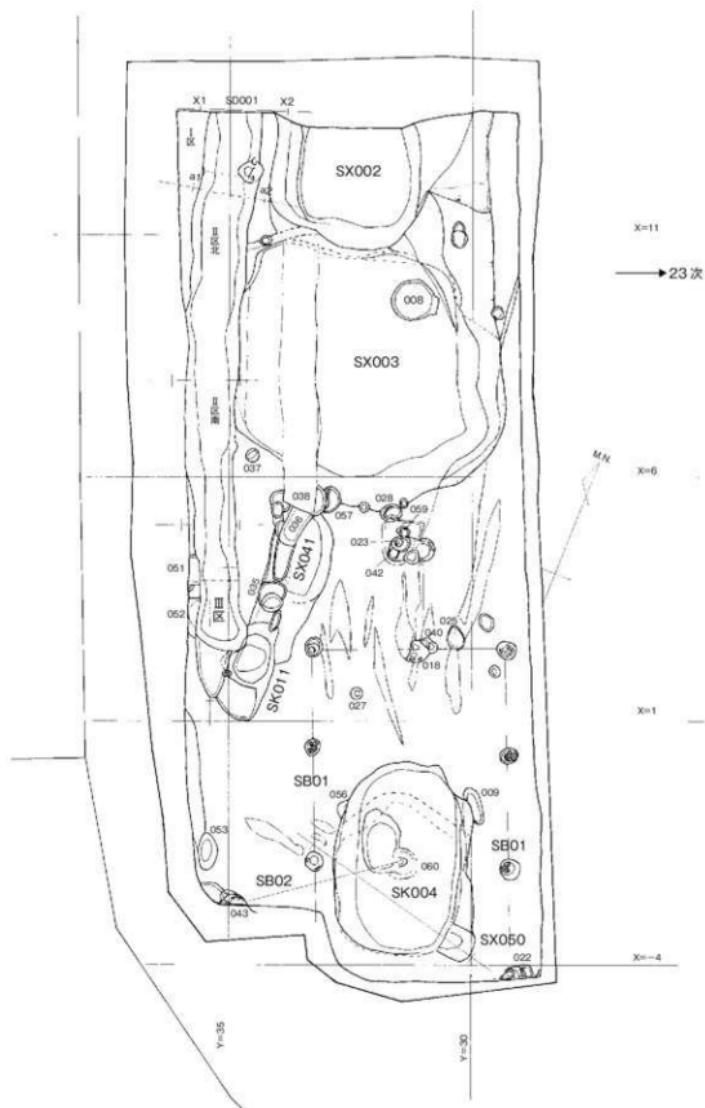
2. 遺構と遺物

以下、遺構と遺物の報告を行うが、主な遺構順に報告し、遺構種別順になっていない。遺構略号として、SDは溝、SKは土坑、SPは柱穴などピット（樹木痕跡など自然遺構を含む可能性がある）、SBは掘立柱建物である。SXは性格不明遺構だが、調査中「SX」とした一部を整理過程で「SK」などに変更している。また「SK」も、実際は柱穴である可能性もある。遺構の主軸（長軸）方位に関しては磁北との関係を記す。国土座標北との関係は本書6頁第2図を参照されたい。

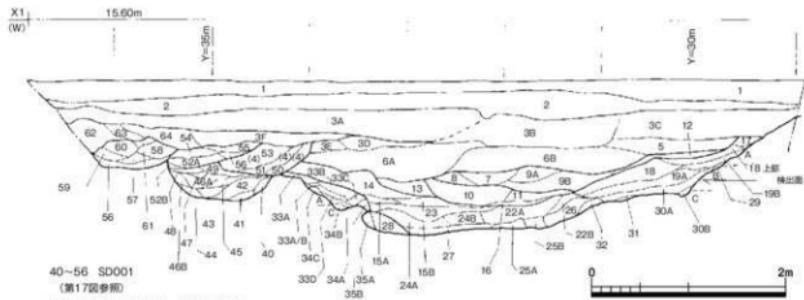
1) 検出遺構

・SD001（平面図は第15図参照、土層断面図は第17図、PL. 2-1、PL. 3-5・6）

調査区西縁を略南北に走行する溝状遺構。12 m長以上で調査区北外側に続き、南側では浅く細くなつて消滅する。南側のこの状態は削平のためであり、本来は南へもさらに延びていた可能性が高い。方位はN（磁北）-20°-E。溝幅は残りの良いところで1.2 m前後だが、第17図に見るように本来の上面では1.5 m前後はあったようである。検出面からの深さも残りの良い北側で30～40 cmだが、本来は調査区北壁土層（第17図）から65 cm前後である。溝底面は北側端が深く標高13.75 m、南端の溝が消える部分で14.4 m前後である。出土遺物は比較的少なく（第25図1～10）、遺構の時期は上層が明代の青花や白磁から16世紀後半、掘削時期は定かではないが中世後半期だろう。中世の凹み（落ち込み）状遺構のSX002・003を切ることからも矛盾はない。なおこの溝は周囲で確認され



第15図 麦野A 24次調査全体図 ($S = 1/100$)



調査区北壁土層

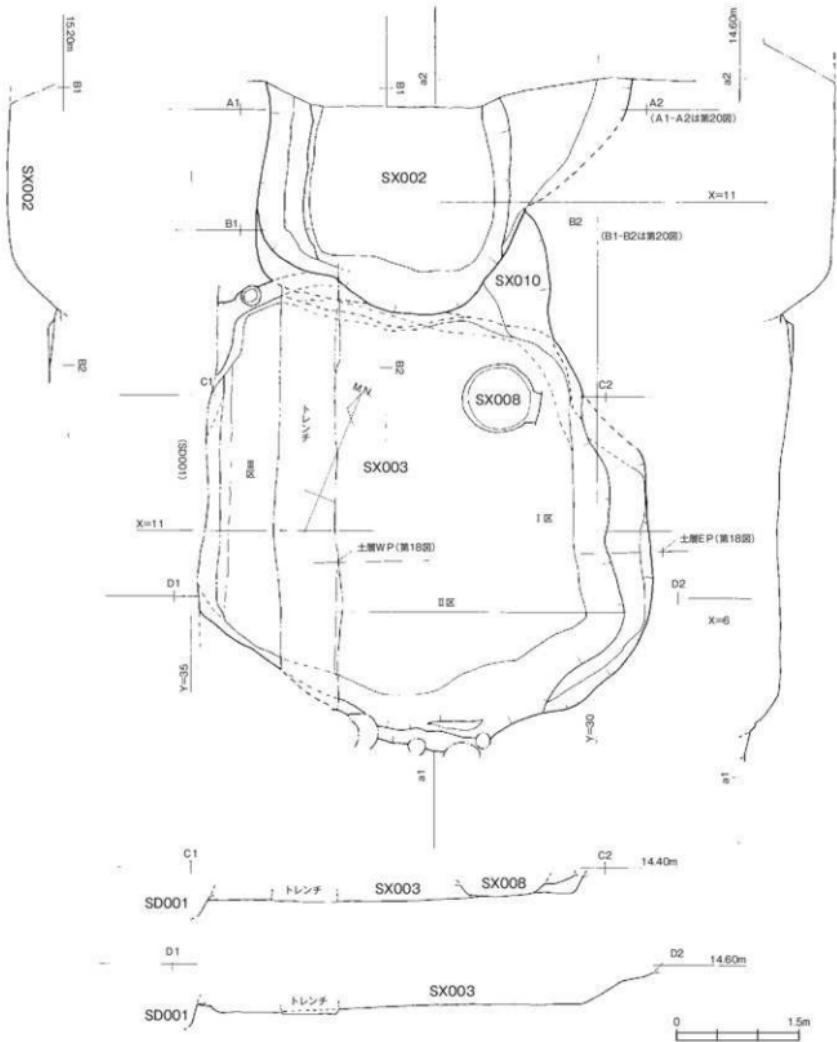
卷之三十一

第16図 調査区北壁横断土層図 (S = 1/50)

ている 16 世紀（戦国期）前後の城館跡の区画溝の一部で、23 次調査 SD001 とほぼ直交している。

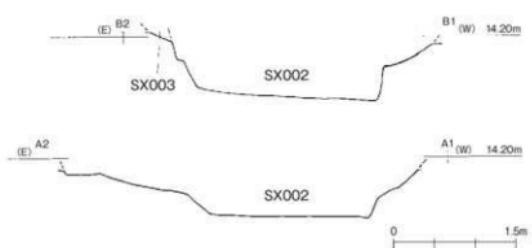
・SX002 (第19図、断面図の一部は第20図、土層図は第16図、PL. 2-1, PL. 3-7)

調査区北側で検出した凹み状ないし落ち込み状遺構。土坑とするには大きく、「堅穴」とするには壁の立ち上がりが急角度でない部分もあり、性格不明遺構とした。ただし土層最下層の一部に濁み状の泥質状を呈するものがあり、貯水遺構ないし「池」状の遺構であった可能性がある。やはり性格不明の凹み状遺構 SX003 を切っている。西側は上部を SD001 に切られる。東側は急角度で立ち上がっ



第19図 SX002・003 平面図・断面図 (S = 1/60)

た後に上部がなだらかになっている。平面は深い部分が隅丸方形で東西3.1m×南北3m以上で北側に続き、東側上部が三角形状に広がりこれを含めると東西4.5m以上となる。深さは検出面から60~70cmだが、北側土層の6A・6B層をこの造構上部の凹みへの堆積とすれば約90cmとなる。底面は比較的平坦で、標高13.4~13.5m前後である。ただし西側壁際と北側がやや深く、西側壁下



第20図 SX002断面図 ($S = 1/60$) ※第19図参照

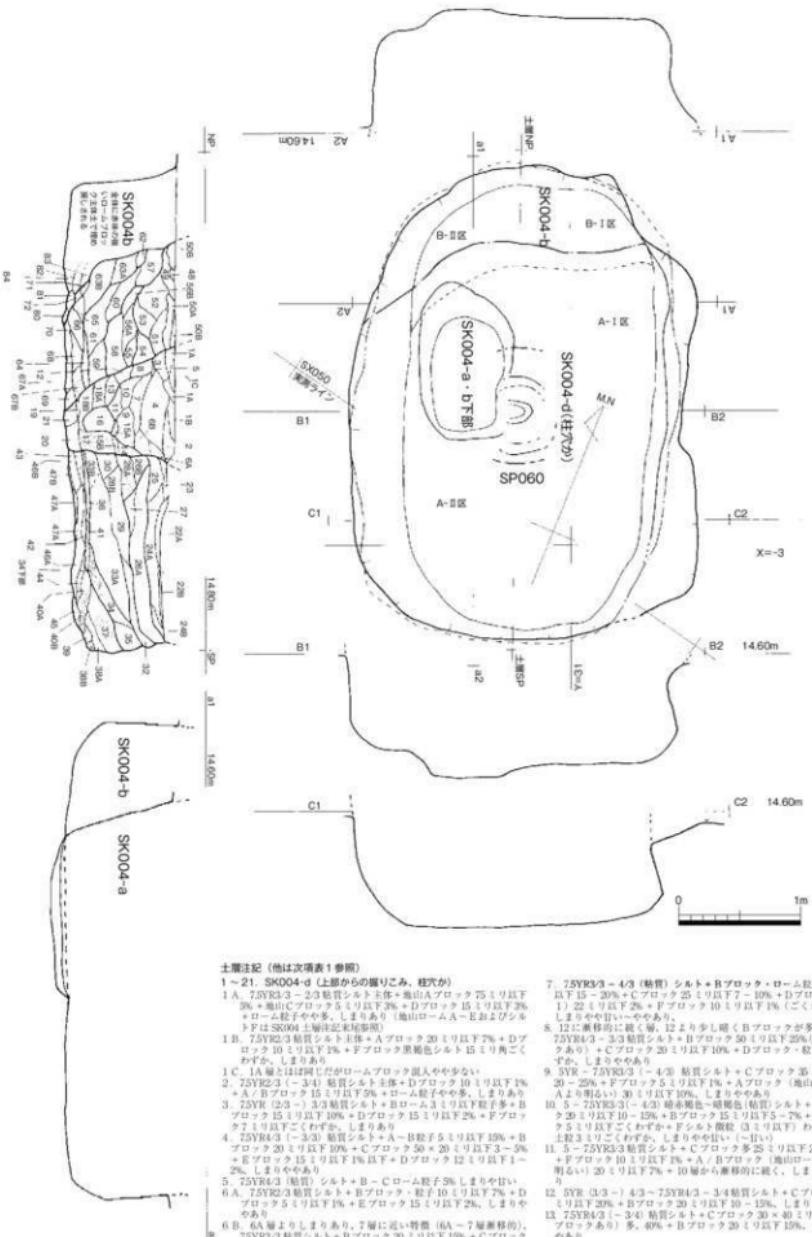
部が外側にえぐれているところがある。滲水の結果かもしれない。なお北側土層(第16図)の33・34層群の凹みは、SX002とは別の造構の可能性がある。出土遺物は非常に少なく、図化できたのは古代の須恵器片(第25図11)ぐらいであり、造構の時期ははつきりしない。

・SX003(第19図、土層断面図は第18図、PL. 2-1、PL. 3-8、PL. 4-1)

調査区中央北側で検出した凹み状造構。西側をSD001に、北側をSX002に切られる。平面形は不整形ないし不整六角形状(?)を呈する。東西5.0~5.3m以上×南北約6m、検出面からの深さは40~55cmで東西は西側が、南北は北側がやや深い。東側の立ち上がりは他より緩やかである。東側から北側にかけては重複するがほぼ同じプランの古い造構が外側にあり(SX010)、それがある程度埋まった後にはほぼ同じ箇所を掘り直したものと観察した。SX010はSX003よりも北側と東側に広がり、東側壁の立ち上がりがSX003よりも急である。底面はほぼ同じ深さである土層を観察すると(第18図)、SX003はロームブロックを多く含む層で占められ、かつ各層の傾きが一定しておらず、自然堆積というよりは、下層以外は埋め戻し的な行為で埋没した可能性がある。造構の性格は不明で、SX002で認められたような下層における澱み状の堆積が認められず、「池」状の形状をしているが判断しかねる。またSX003埋没後に上部から径100cm前後の円形ピット状造構(SX008)が掘られるが、柱穴としては単独であるため性格不明造構とした。出土遺物は比較的多く、図化できたものも多い(第25図12~32)。中には飛鳥時代後半・奈良時代~平安時代前期の須恵器や土師器も認められるが、上層~中層出土には14~16世紀の青磁・白磁・土師器小壺があり、下層には13~14世紀頃の土師器壺等がある。SX010からの出土遺物には(第25図33・34)、13世紀と思われる瀬戸焼の鉢皿がある。したがって造構の掘削時期はSX010が13世紀、SX003が14世紀で、凹みの一定維持期間を経て、15~16世紀のある時期に一気に埋められたものと考える。

・SK004(第21図、土層注記は表1、PL. 2-3、PL. 3-1~4)

調査区南側で検出した不整長方形ないし小判形(梢円形)の堅穴状土坑。当初性格不明造構(SX)としていたが、類例から堅穴状の土坑で穴藏(貯蔵穴)の可能性を考える。検出時の平面把握と土層の検討から、当初南北に長い小判形の土坑があり(SX004-b)、それが一度埋まつた後に不整長方形の新たな土坑(SX004-a)が掘り直されたものと判断した。004Aと004Bの覆土の違いは明瞭である。調査時はさらに004-aの中にもう一基の重複(004-c)を考えたが、後に認識を改めた。さらに平面では当初全く不明であったが、南北の土層ベルトを残して掘削しベルト両側の土層を検討する過程で「SX004-d」が上部から掘りこまれていることを確認した。ただしこれは大型の柱穴(SP060とする)で土坑ではない。堅穴状土坑の規模、東西は2.7~2.8m幅、南北長は004-aが3.9m、004-bが3.3mである。深さは、土坑北半がやや深く検出面から80~90cm、南半は凸凹あるがやや浅く70~80cmで、また底面中央北東部が一段低く凹み、検出面から100cm前後の深さとなる。土坑の壁であるが、東辺から南辺は下部が外側に若干オーバーハングする。東辺上部は直立ないし内傾する壁の上部がなだらかな斜面となる。造構の方位は、中軸が土坑上端と下端で異なるものの、N-21°~24°-Wであり、SB01の方位に近い。平面的にもSX004はSB01のおよそ中央にあり、



土層注記(他は次項表1参照)

1～21. SK004-d(上部からの覆りこみ、柱穴)

1.A. 7SYR3-3～2/3 細粒シルト主体・地山Aプロック75.5より以下

30cm以上Cプロック5.5より下3% + Dプロック15.5より下2%

1.F. SK004 土層の記述事例参照

1.B. 7SYR2/2 細粒シルト主体・Aプロック20.3より下7% + Dプロック10.3より下1% + Eプロック・黒褐色シルト15.5%角ごわつか、しまりあり

1.C. 7SYR2/2 細粒シルト主体・Dプロック10.3より下1%

A/Bプロック15.3より下5%・ローラー見子の形、しまりあり

3. 7SYR3-3(2/3) 細粒シルト+Dプロック3.1より下10%+Eプロック15.3より下10% + Dプロック15.3より下2% + Eプロック15.3より下10%

4. 7SYR4-3(3-3) 細粒シルト+A-B粘土5.5より下10% + Bプロック20.3より下10% + Cプロック50.3より下20% + Dプロック15.3より下10% + Eプロック12.3より下1-

2%・角ごわつか、しまりあり

5. 7SYR3-3(粘質) シルト+B-C-E泥炭質5%・しまりやけい

6.A. 7SYR2/2 細粒シルト+Bプロック・粘土10.3より下13.7% + Dプロック5.3より下1% + Eプロック15.5より下2%

6.B. 7SYR3-3 粘りあり、7層に近い骨胞(6A～7層遷移的)、

7SYR3-3 細粒シルト+Bプロック2.0より下10% + Cプロック

10.3より下5% + Eプロック5.3より下わずか+黒褐色シルト

Dプロック5.3より下3% (表を省略)

7. 7SYR3-3～4/3(粘質) シルト+Bプロック・ローム粒子5.1より下15.3～20% + Cプロック5.1より下7% - 10% + Dプロック(大プロック1) 5.1より下26% + Eプロック5.1より下1% (ごくわずか)、

12.5より下10%+Eプロック5.1より下1% (ごくわずか)、

第21図 SK004 平面図・断面図・土層図 (S = 1/40)

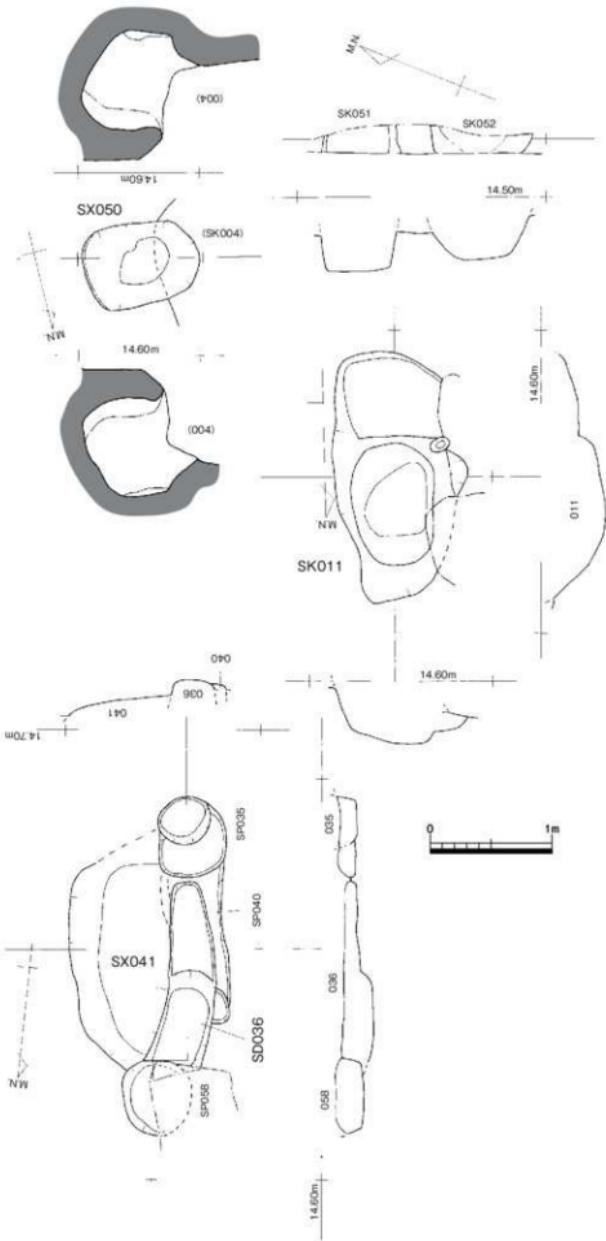
表1. SK004 土層注記 (第21回-15層以下)

示すものは中世の土師器壺・皿類や青磁があり、13世紀後半から14世紀頃に掘削された遺構か。ただし中上層は15～16世紀頃の遺物もあり、埋没に時間がかかった可能性もある。なおSK004の南

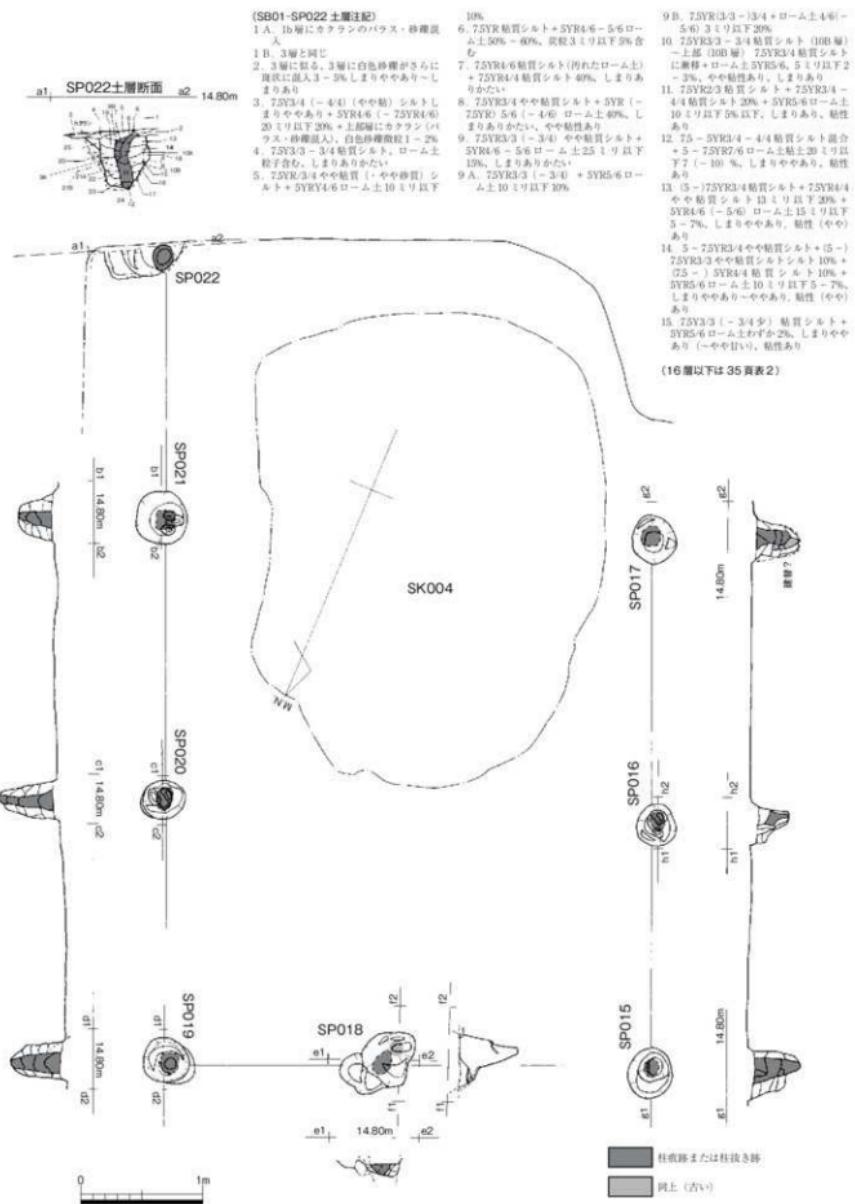
東隅角付近の壁から、斜め下に大きくオーバーハングする遺構が取り付いていたが、覆土の色や質が004とは全く異なり、別遺構(SX050)と判断した。

- ・SX050(第22図左上、PL. 4-2~5)

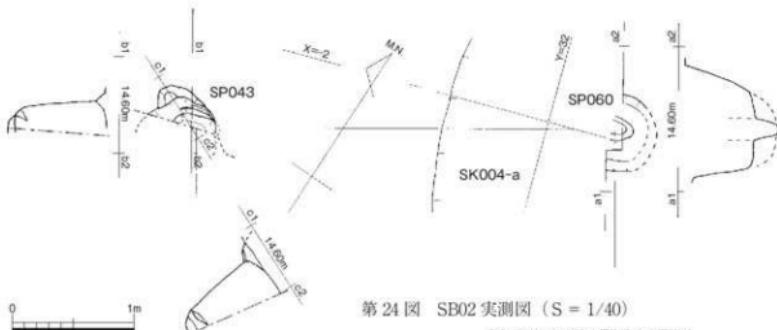
SX004南東隅角壁で検出。覆土は黒褐色粘質シルトでありSK004の覆土とは全く異なる。横穴状に掘り込まれる土坑で、横穴入口部の径は上下斜面が60cm前後、横穴部の最奥部は入口斜面から水平に東へ75cm前後、これより上へ22cmで天井部、これより下へ60cmで床面となる。天井部を外した時の平面形は東辺が広い不整砲弾形状で、東西94cm×南北60~68cmである。横穴入口部上端は斜め上方に立ち上がり、この横穴状土坑の西側上部には別の土坑が取り付いていたとみられる。さてこのような遺構の類例としては、弥生時代後期の「足元掘込土壙墓」がある。覆土の特徴も古代よりもさらに古い。近隣の遺構覆土では古墳時代以前、弥生時代に多いものがあり、形状と覆土からその可能性は低くない。しかし、慎重に精査して掘削し、また覆土の大部分をふるいにかけても土器片も玉類1点も出土しなかった状況では、時期が不明であり、墓と断定することには慎重になる。そのため「足元掘込土壙墓状土坑」と呼称しておく。もし近隣で確実な



第22図 その他の土坑・溝状遺構実測図 (S = 1/40)



第23図 SB01 実測図・柱穴土層断面図 (S = 1/40)



第24図 SB02 実測図 ($S = 1/40$)

同遺構が検出された場合に、本遺構もその可能性が高まると思われる。

・ SX041 (第22図下、PL. 3-5)

調査区中央西で検出した不整梢円形状の土坑。SD036などに切られる。覆土は褐色土だが中世の色合いではなく古いものか。南北 210 cm × 東西 110 cm 前後、検出面からの深さ 16 cm。長軸は N-6°-E のなのでほぼ真北。底面は平坦ではなく浅鉢状。出土遺物に乏しく時期不明。

・ SD036、SP058・035 (第22図下、PL. 3-5)

調査区中央西で検出。直線的というよりは若干弧状の溝。SD036 は SD040 を切るが、同一溝の掘り直しかかもしれない。1.55 m 長以上、幅 30 ~ 45 cm、深さは北側の深い部分が 30 cm、南側の浅い部分は 16 cm。南北両側を切る SP058 と SP035 は、あるいは一連の遺構でたとえば門柱などか。058 は径 60 cm、深さ 22 cm、035 は 67 cm × 56 cm の不整円形で南側に径 40 cm の柱抜き跡がある。058 と 035 の間は、芯々 (035 は柱抜き跡中心) で約 235 m。この柱筋の方位はほぼ磁北方向。出土遺物に乏しく時期不明だが、これらの南側には SK011 があり切り合があるが、方位がほぼ同じであり一連の遺構または時期が接したものかもしれない。

・ SK011 (第22図右中、PL. 4-7)

調査区中央南西で検出。西側を SD001 に切られる。長方形気味の土坑で、南側は浅くテラス状となる。南北 210 cm × 東西 110 cm、中央から北側の深くなる部分は南北約 140 cm。深さは 42 cm、テラス部分は 23 cm。方位は長軸 N-1°-W で SP058-035 の筋とほぼ同じ。出土遺物が若干あり (第27図5~8)、土師器壺皿の型式から中世後期 (15 ~ 16世紀) の遺構であろう。

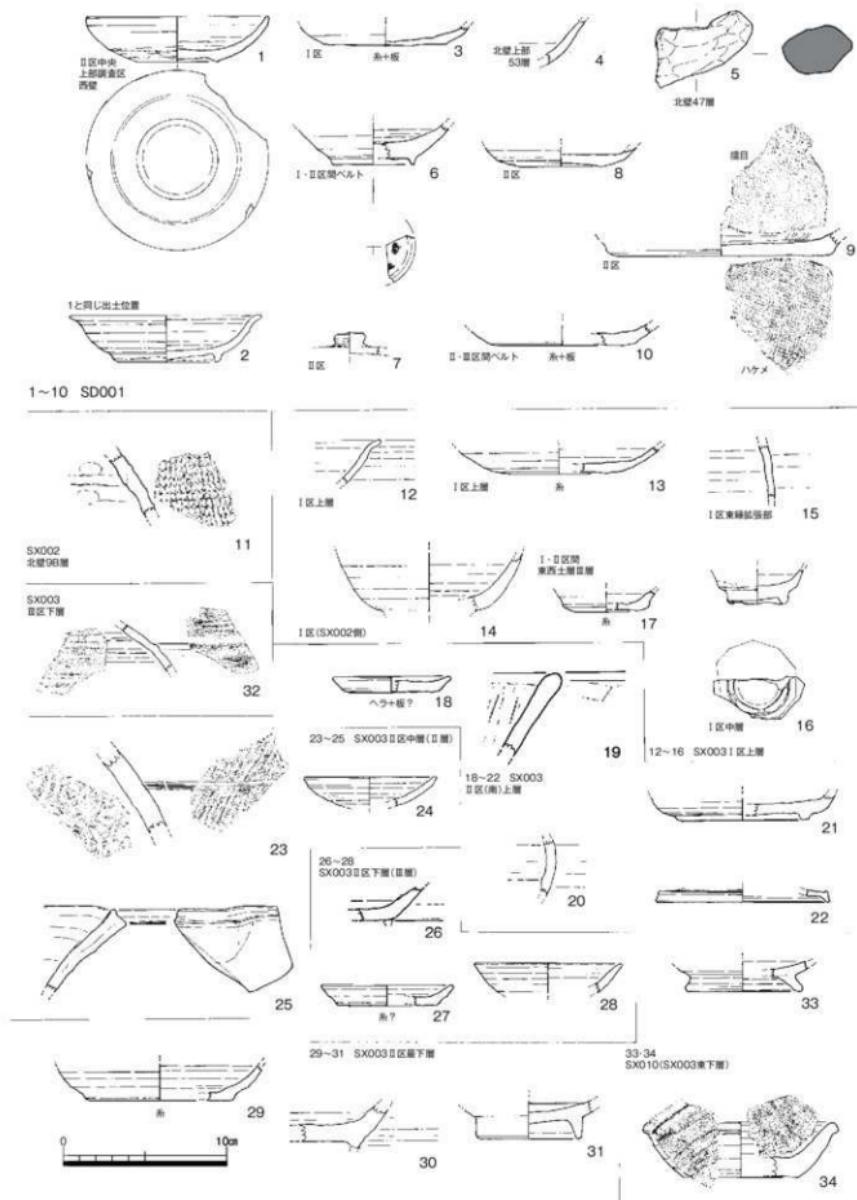
・ SK051 (第22図右上、PL. 4-6)

調査区西縁辺で SK052とともに検出。東側を SD001 に切られ、西側は調査区外。覆土は、上層が 7.5YR 4/4 のシルト主体、下層は 5YR 5/6 のロームブロック主体。径 86 cm 前後、深さ 35 cm 前後。北側を調査区壁土層で上端を確認したので、数値上は次の 052 より深さがあるようになるが、実際は底面レベルは 052 より高い。土坑としておくが柱穴の可能性もある。

・ SK052 (第22図右上、PL. 4-6)

表2. SB01-SP022 土層記録 (16 層以下)

16.	赤みの強いシルト、SYR4-4 (-3-4) 粘質シルト + SYR4-6 ローム土 25.1 10cm 下 30% + 7.5YR3-4 粘質シルト 20%、しまりやや多い、粘性あり
17.	7.5YR3-3 粘質シルト + SYR - 7.5YR3-4 粘質シルト 25% + SYR ローム土 10 cm 以下 70%、しまりやや多い - やや多い、粘性あり
18.	7.5YR3-4 粘質シルト + SYR5-6 ローム土 15 cm 以下 15%、しまりややあり (-やや多い)、粘性やや多い
19.	7.5YR3-4 粘質シルト + 7.5YR3-4 粘質シルト 20 cm 以下 22%
20.	+ 7.5YR3-2 粘質シルト 5% (移動の跡を認する) + SYR5-6 (-6) ローム土 10 cm 以下 5%、しまりありかたい、ややシント質、粘性あり
21.	7.5YR3-4 やや粘質シルト + 7.5YR3-3 粘質シルト 25% + SYR5-6 ローム土 10 cm 以下 5%、しまりあり、粘性やや多い
22.	7.5YR3-4 粘質シルト + 7.5YR3-3 粘質シルト 20% + SYR6-5-6 ローム土 15 cm 以下 7-10%、しまりやや多い、粘性あり
23.	7.5YR3-4 粘質シルト + SYR4-6 ローム土 10 cm 以下 40%、地山に土層間に砂層入る、土と砂層の接続部で柱穴がある
24.	SYR4-6 (-3-4) - 7.5YR3-4 (-4-4) 粘質シルト (移動の跡に土塊が変化) + SYR5-6 ローム土 10 cm 以下 10-15%、地土 7.3 10cm 以下 1-2%，泥炭 1%，しまりあり
過山 A.	SYR4-6 - やや粘質ローム土、ややサラサラ - ザザラ感じのシルト質 (鳥糞ローム)
過山 B.	SYR5-6 - 6.6 やや粘質 + SYR6-6 粘質 20% + SYR (-7.5YR) 7.6 粘土フロックが混在するローム土、ややザザラ感 (鳥糞ローム下部)



第25図 SD001・SX002・SX003出土遺物実測図 (S = 1/3)

SK051 の北側で検出。東側を SD001 に切られ、西側は調査区外だが本来の遺構の中心はやや東側。径 64 cm、深さは 32 cm。上層は 7.5YR 3/4-4/3、中層は 7.5YR 4-4 のシルト、下層はロームブロック多くなる。土坑としておくが柱穴の可能性もある。051 と 052 は出土遺物に乏しく時期不明だが、土色から中世前半ないし古代の可能性がある。

・ **SB01** (第 23 図、PL. 2-3、PL. 4-8 ~ 16)

調査区中央から南側にかけて検出した掘立柱建物。2間×3間、柱痕間で 4.0 m × 6.7 m。方位は N-22.5°-W。南東隅の **SP022** が大きく深いので隅柱だろう。ほぼ全ての柱穴で柱痕跡ないし柱抜き跡を検出した。柱痕は上部で径 14 ~ 20 cm だが、下部はすばまって行く。梁間の途中の **SP018** は梁間の中間から少しづれるが、浅い柱穴と深い柱穴が切り合い、補助的な東柱だろう。位置的に **SK004** が建物の中央（やや南）に入り、伴う可能性がある（裏表紙写真）。各柱穴から若干の遺物が出土しており（第 27 図）、中世でも 13 ~ 14 世紀の建物であろう。

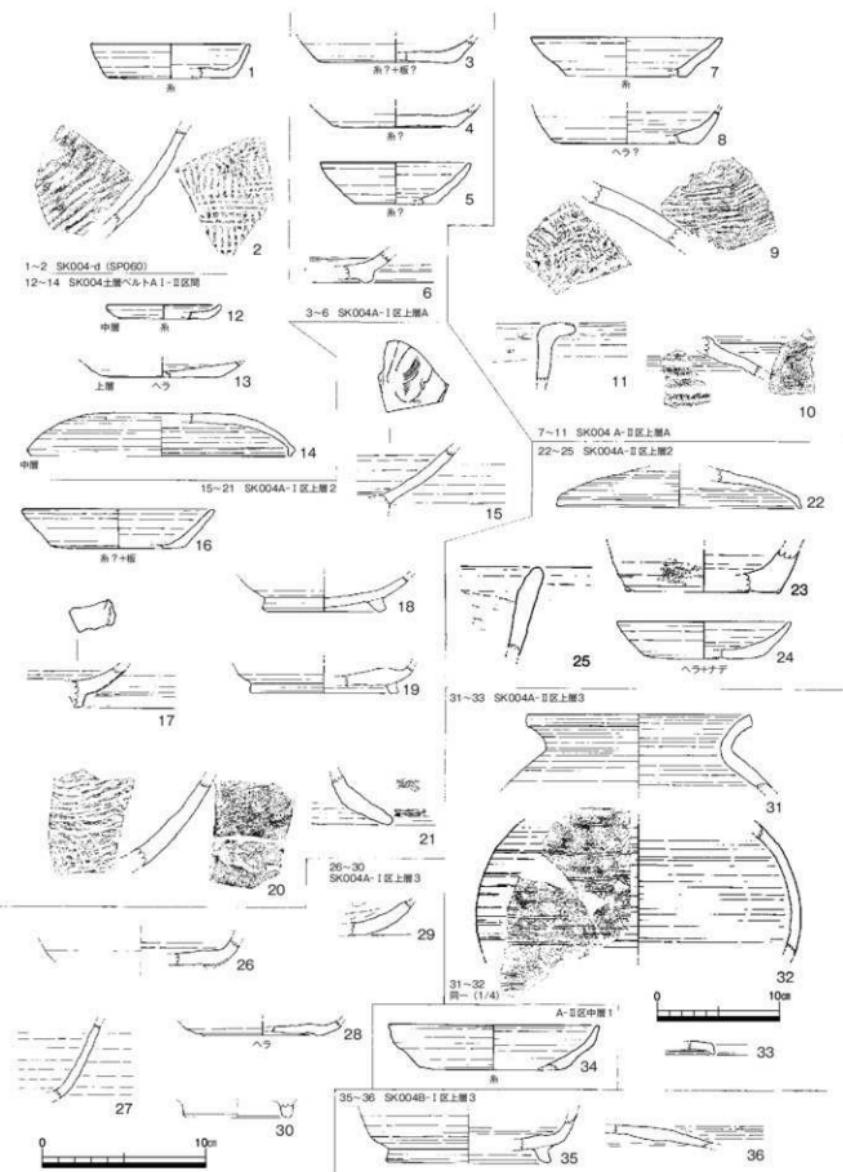
・ **SB02** (第 24 図)

調査区南～南西で検出。2柱穴だけだが柱間が広いのでおそらく調査区外南側に展開すると思われる。当初「**SX004-d**」とした SX004 中央の遺構を大きな柱穴（SP060）と判断したが、後に調査区南西隅で掘削した SP043 が同様に大きく深くなる柱穴となったので、両者が組み合わざるものと判断した。柱間は約 3.5 m、方位は N-57-E。SK004 を切るのでこれより新しいが、SK011 やさらに新しい SD001 とも異なる方位であり、14 世紀以降の中世後期のどこかとしか時期を絞り込めないが、出土遺物のうち SP060 出土の土師器坏（第 26 図 1）が伴うならば、楠瀬慶太による編年 VI b 期にあたり（楠瀬 2009）16 世紀後半か。

2) 出土遺物（第 25 ~ 27 図）

出土遺構の層位や位置などの詳細は図面中に記した。以下、各遺物について簡潔に記す。

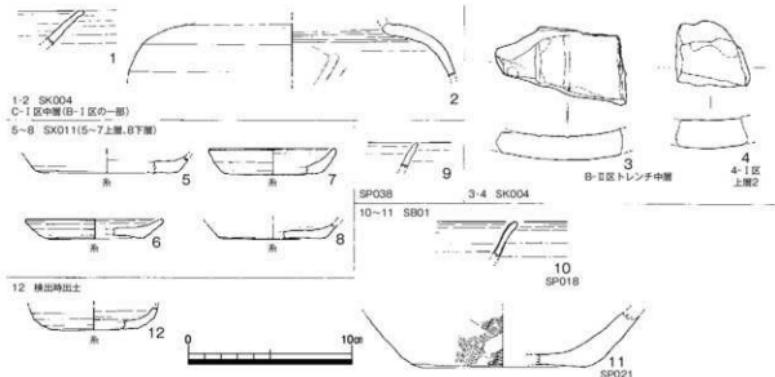
（第 25 図）1 ~ 10 は SD001 出土。1 は明代の青花皿。外底は体部下部から露胎。2 は明代の白磁皿。高台は削り出し、疊付は高台下部から露胎。3 は土師器の坏。4 は土師器の塊。5 は土師器の壺ないし把手付鍋（壺）の把手。飛鳥～平安時代初期のものだろう。6 は越州窯系青磁の碗。オリーブ灰色（緑灰色）透明釉。高台は削り出し、疊付は露胎。奈良～平安時代前期か。7 は須恵器の壺ないし壺などのつまみ付蓋。奈良時代。8 は同安窯系青磁の皿。外底は露胎。9 は土師器の摺鉢。内底外縁から摺目、外底はハケメ。中世後半以降。10 は土師器の坏。11 は SX002 出土。須恵器の壺ないし壺。外面は格子目タタキ。12 ~ 31 は SX003 出土。12 は白磁碗。13 は土師器の坏。14 は龍泉窯系青磁碗。15 はオリーブ緑灰色釉の褐釉陶器。大宰府分類の陶器壺 B 群。16 は体部を多角形（八角形か）に作り出す白磁の小碗。高台削り出し、外底は体部下部から露胎。17 は土師器の皿。楠瀬編年（楠瀬 2009）の VI a 期のヴァリエーションで 16 世紀前半か。18 は土師器の皿。楠瀬編年 V b 期。19 は土師器の壺。内面はタテのヘラケズリ。奈良時代か。20 は中国製褐釉陶器の壺。オリーブ緑灰色釉。21 は須恵器の高台付坏。22 は須恵器の高坏脚裾部。21・22 は奈良時代。23 は須恵器壺の胴部破片。外面は斜位の平行タタキ後に先が割れたような工具による回転沈線を施す。24 は白磁の皿。外面は中位以下露胎。25 は中世土師器の捏鉢。楠瀬編年（日用雑器類）Ⅲ期か（楠瀬 2009）。26 は須恵器の高台付坏。高台が剥離している。奈良時代。27 は土師器の皿。口径 8.1 cm で形状も考慮し、楠瀬編年 IV a 期（14 世紀前半）だろう。28 は口禿げの白磁皿 IX 類。13 世紀後半～14 世紀前半。29 は土師器の坏。口径は 13.0 cm 前後だろう。楠瀬編年では IV b 期（14 世紀後半）の型式に近いが、山本編年（山本信夫 1990）では IX 期（13 世紀末～14 世紀前半）に近い資料がある。30 は須恵器の高台付壺。奈良時代。31 は龍泉窯系青磁碗。32 は新羅・高麗系無釉陶器。外面は横位の平行タタキをナデ消し、小突帯がある。内面は凹凸が顕著な四線状の回転ナデ。33・34 は SX010 (003 古) 出土。33 は土師器の塊。平安時代中期（10 ~ 11 世紀）。34 は瀬戸焼のオロシ皿。



第26図 SK004出土遺物実測図(1) (S = 1/3、一部 1/4)

内底に鋭利な工具により格子目に刻んだオロシ目がある。外面は灰白色の、内面はオリーブ灰黄色の半透明釉。体部外面下部から外底は露胎、外底はヘラ切り。古瀬戸前期様式Ⅱ期（13世紀前葉）か（藤澤良祐 1995）。

（第26図）1・2はSP060出土。1は土師器の坏。口径9.8 cmで、楠瀬編年VI b期、16世紀後半か。2は須恵器壺の胴部下半破片。内面の当具痕は粗い平行タタキ状のもの。3～34はSK004-a出土。3～5は土師器の坏。いずれも外底が摩滅しているが、回転糸切とみられる。3には板目压痕があるか。5は口径9.2 cmであり見ない形態。近いものは楠瀬編年VI b期にある。6は白磁碗IV類。7は土師器の坏。口径11.6 cmで、楠瀬編年V b期（15世紀中頃～後半）か。8は土師器の坏。外底はヘラ切りとみられ、古代の坏だろう。9は須恵器壺の胴肩部破片。外面は横位の平行タタキ。古代か。10は新羅・高麗系無釉陶器。外面には小突帯があり、縦位平行タタキ後ナデ消し。内面は細かい格子目状の当具痕を凹凸の顯著な回転ナデで消す。内外表面青黒灰色、器壁は紫黒灰色。11は中世土師器の鍋。12は土師器の皿。楠瀬編年だとVI a期（15世紀末～16世紀前半）か。13は土師器の坏。外底はヘラ切りで、12世紀前半頃。14は須恵器の坏蓋。奈良時代。15は白磁碗。高台削り出し。16は土師器の坏。楠瀬編年V b期か。ただし板目压痕らしき痕跡があるので古い可能性がある。その場合、山本信夫編年（山本信夫 1990）XIX期（13世紀末～14世紀前半）の坏bの可能性もある。17は龍泉窯系青磁碗。高台削り出し。18は黒色土器塊。19は須恵器の高台付坏。20は須恵器壺の胴部下半破片。外面は斜めの木目直交平行タタキ後ナデ。21は土師器で、高坏の脚裾部として図化したが、原稿執筆時に再検討したところ、天地逆で壠ないし鍋の口縁部と判明した。19～21は奈良時代。22は須恵器の坏蓋。胎土に黒色砂礫を含み、表面が暗褐色気味で当地ではあまり見ない雰囲気であり外来系の搬入品の可能性がある。23は陶器（炻器質）ないし中世須恵器の壺。無釉で、外面はよく見ると斜位の格子目タタキをナデ消す。灰色の地色で外表面はやや橙色気味になる。中世の瓦質土器にも近い雰囲気で、陶器というよりは中世須恵器の一種か。24は土師器の坏。外底はヘラ切り後ナデ、古代の坏か。25は土師器の瓶と思われる。内面は口縁部ヨコナデより下はヨコのヘラケズリ。飛鳥～奈良時代。26は須恵器の高台付坏。27は須恵器の坏類だが体部が長くなるものか。26・27は奈良時代。28は土師器の坏。外底はヘラ切りだが、その外縁は退化した痕跡的な高台に見える。平安時代初期か。29は土師器の塊。外底にはヘラケズリがある。飛鳥



第27図 SK004 (2)・SK011・SP (柱穴)他出土遺物 (S = 1/3)

時代か。**30**は龍泉窯系青磁碗の高台。**31・32**は同一個体の須恵器ないし須恵器系陶器。内面は丁寧な回転ナデ、胴部外面も丁寧な回転ナデだが（この前に縦位の平行タキ痕跡がある）、工具による回転ナデで、一部沈線状になつたり（一周しない）、凹線状になる部分がある。あまり見慣れない調整で、古代にても中世に至っても外來系の搬入土器だろう。**33**は須恵器の土師器の坏蓋。奈良時代。**34**は土師器の坏。口径 128 cm、底径 84 cm で体部内湾。楠瀬編年だと IV b ~ V a 期（14 世紀後半～15 世紀前半）か。**35・36**は SK004-b 出土。いずれも飛鳥時代末期の須恵器。**35**は高台付坏。**36**は坏蓋。

（第 27 図）1～4 は SK004-b 出土。1 は土師器の坏。2 は土師器の湯釜。3・4 は平瓦だが土師質で古代の瓦か。5～8 は SK011 出土。5 は土師器の坏。6・7 は土師器の皿。8 は土師器の坏か皿か微妙な形態・法量。9～11 は SB01 の柱穴出土。9 は中国製天目茶碗の口縁部。黒釉で一部茶褐色。胎土は灰色。10 は龍泉窯系青磁碗。11 は中世土師器の鉢（捏鉢）。14 世紀前後の型式か（楠瀬 2009 の「Ⅲ期」）。12 は遺構検出時の出土。土師器だが坏か皿か微妙な形態だが法量的には皿か。

（文献）

- 楠瀬慶太 2007 「日用雜器類から見た中世土師器の土器様相」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会
楠瀬慶太 2009 「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相」『九州考古学』第 82 号
藤澤良祐 1995 「9、中世陶器〔1〕古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社
山本信夫 1990 「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集

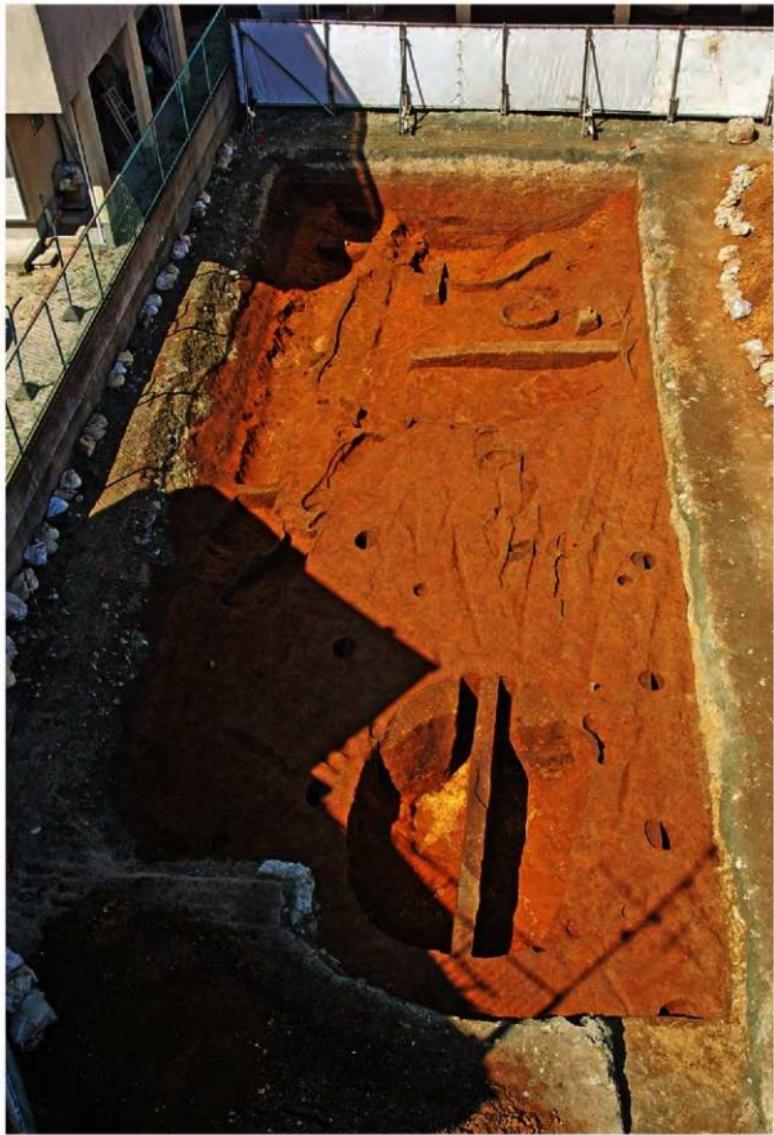
3. 調査のまとめ

多くの遺構は、確実な年代としては鎌倉時代から近世初期（戦国時代末期）までであったが、古代（飛鳥時代～平安時代前期）の遺物（土師器、須恵器など）が比較的多くあり、その時期の確実な遺構はなかったが、東に隣接する 23 次調査でみられたような古代の遺構は削平されたとみられる。越州窯系青磁碗もあり、23 次の井戸遺構とともに有力者の屋敷の存在も考えられる。

中世後半（戦国時代）の溝 SD001 は、周囲で確認される壕で開郭された 120×160 m の方形館の内部を区画する溝であろう。豊穴 SK004 のような中世の貯蔵穴状の豊穴は、周囲でも麦野 A 1 次・7 次で確認されている 24 次調査では、位置関係と出土遺物から推定される時期の一一致（13 世紀後半～14 世紀前半後）から、据立柱建物 SB01 が貯蔵穴（穴倉）の上屋として同時存在した時期があった可能性が高い。凹み状遺構 SX002 と SX003 のうち、土層の観察から前者については貯水のための遺構ないし溜水していた遺構の可能性が考えられたが、浅い方の後者については不明確であった。類例の検討を要するが、SX002 は屋敷（館）内の池ないし溜井などが考えられる。SX003 も、出土遺物からやや長い維持期間が推測され（先行する SX010 は 13 世紀代、SX003 は 14 世紀に掘り直し、16 世紀頃埋め戻し）、埋没時は人為的な埋め戻しが考えられるので、屋敷（館）内の池との推測は一つの候補になる。

また SX050 は、覆土と形状から弥生時代後期の「足元掘込土壤墓」の可能性を考えた。もし足元掘込土壤墓であれば、これは壺棺墓の掘り方から壺棺を省略したものから変化成立する土壤墓であるので、本遺構のような横穴状掘込部（足元掘込部）がかなり突出するものは、型式学的に古いものであり、後期初頭の可能性がある。しかしながら出土遺物などによる証拠は無いため断定はできない。今後の周囲の調査で同様の遺構ないし弥生時代後期の墳墓などが出てないかが注意される。なお 24 次調査から北西 250 m の麦野 A 8 次調査では、弥生時代中期後半～後期中葉の遺構と遺物を検出しており、麦野 A 遺跡において当該期の遺構がさらに検出される可能性はある。

以上のように、麦野 A 24 次調査では、遺跡における古代から中世の遺跡の展開を確認することができ、また弥生時代遺構の展開を予想させる遺構が検出された。



麦野A 24次調査状況全景（南から）



1. 調査区北半遺構掘削状況（南から）



2. SD001 掘削状況（北から）



3. SK004 と SB01（南から）



1. SK004 上面検出状況（東から）



2. SK004 南北ベルト西側土層（西から）



4. SK004 中央 SP060 確認状況(東から)



3. SK004 南北ベルト東側土層（東から）



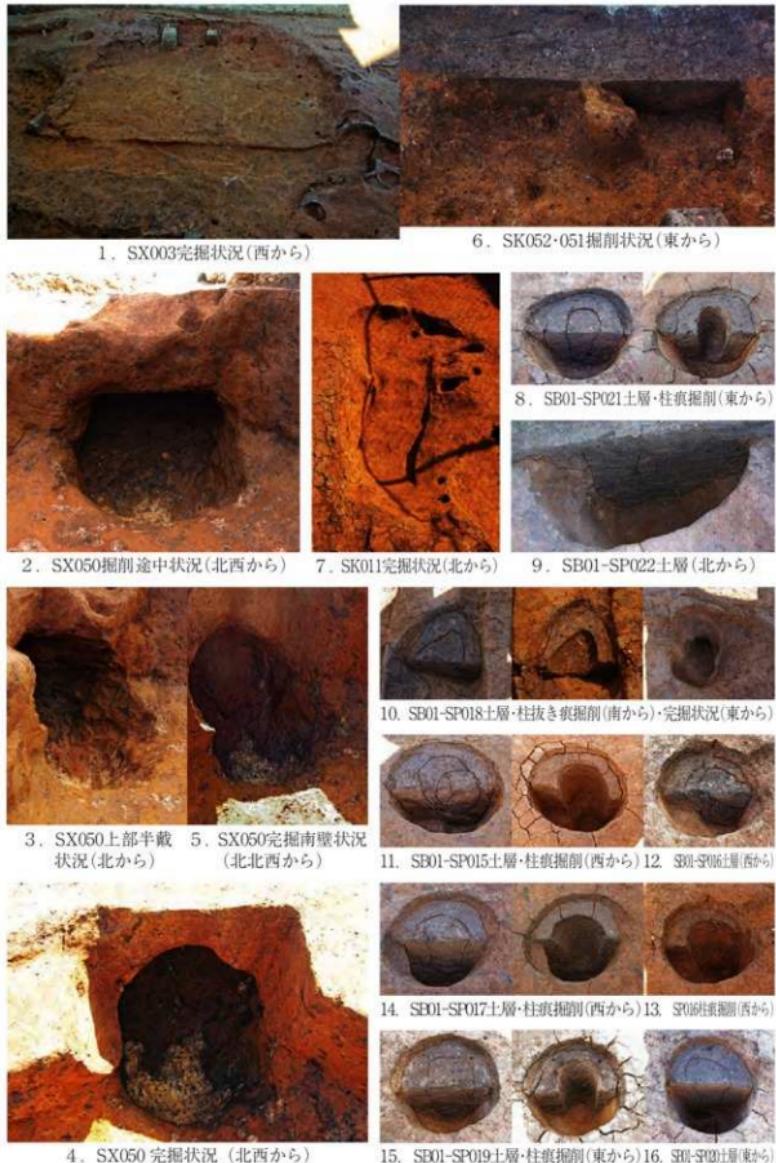
5. SD001-II区南半・III区、SK011-SD036-SX041 掘削状況（南から）



7. SX002 完掘・北側調査区壁面土層（南から）

6. SD001-I 区北側調査区
壁面土層（南から）

8. SX003 掘削状況・横断ベルト土層（北から）



ふりがな	むぎのえーいせき9			
書名	麦野人遺跡9			
副書名	—麦野人第23次・24次調査報告—			
巻次	9			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	1323			
編著者名	清金良太、久住雄雄			
編集機関	福岡市教育委員会			
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号092-711-4667			
発行年月日	西暦 2017年3月27日			
遺跡名ふりがな	むぎのえーいせき9い23じちょうさ			
遺跡名	麦野人遺跡第23次調査			
所在地ふりがな	ふくおかはからくむぎの3ちょうめ11ばん25, 33, 60, 62			
遺跡所在地	福岡市博多区麦野3丁目11番25, 33, 60, 62			
市町村コード	40132	遺跡番号	0048	
北緯	33°33'14"(世界測地系)	東経	130°27'39"(世界測地系)	
調査期間	平成27(2015)年1月5日～3月6日			
調査面積(㎡)	347㎡			
調査原因	共同住宅建設			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	飛鳥時代 奈良時代	柱立柱建物、 井戸、土坑、柱穴	土器類、須恵器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、圓底陶磁器、灰、木製品(舟形 削出物)、石器(鉋量6箱)	9世紀代と13世紀代の井戸が2基重複して検出され、9世紀代の井戸は井戸側として木製品の曲物を使用していた。東西に延びる溝が検出された。断面は箱型状であり、この時は第6・9・18・20次調査で検出された溝とつながり、方形窓(城館)の外観構造となる。溝は戦国期の16世紀に掘削されたが、3回の掘り直しが推定され、埋没は出土遺物から近世前期に下ると見られる。
	平安時代 鎌倉時代			
	室町時代 戦国時代			
	江戸時代			
遺跡名ふりがな	むぎのえーいせき9い24じちょうさ			
遺跡名	麦野人遺跡第24次調査			
所在地ふりがな	ふくおかはからくむぎの3ちょうめ11ばん59			
遺跡所在地	福岡市博多区麦野3丁目11番59			
市町村コード	40132	遺跡番号	0048	
北緯	33°33'18.6"(世界測地系)	東経	130°26'26.2"(世界測地系)	
調査期間	平成27(2015)年2月25日～3月27日			
調査面積(㎡)	155.4㎡			
調査原因	個人専用住宅建設			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	飛鳥時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 戦国時代 江戸時代	溝、凹み状遺構(貯水槽構、 泡?)、貯蔵穴(六穴)、土坑、 柱立柱建物、柱穴	土器類、須恵器、高麗無釉 陶器、輸入陶磁器、 国产陶器、瓦	多くの遺構の確定的な時期は中世の鎌倉時代から戦国時代までだが、古代(飛鳥時代～平安時代初期)の遺物が多々ある。古代の確定した遺構はなかったが、裏に隣接する23次調査や24次調査で確認された古びの遺構が判明しているのだろう。
				中世後期(鎌倉・戦国時代)の溝は、周囲で確認される様で新削された120 × 160 mの方形窓の内部を区画する構であろう。出土遺物から近世初期に押没する。中世の廐藏穴状の堅穴式土坑は、周囲でも更にA1次、2次で確認されている。この確認の廐藏穴(六穴)では柱立柱建物が上層として作る可能が高い。13世紀前半～14世紀と見られる。中世の廐藏穴は貯水槽や笠置敷池の池と推測される凹み状遺構が2基検出された。時期は13世紀後半以降である。
				そのほか、弥生時代後期の延足込込土壙墓に非常に類似した土坑が検出された。弥生時代との相違はないが、爾土の特徴は弥生時代でもよい。今後の周辺の調査の際に注意すべきであろう。

麦野A遺跡9

—麦野 A 遺跡第 23 次・24 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1323集

2017年3月27日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8-1

印 刷 株式会社 博巧印刷

福岡市南区那の川一丁目9番7号

